



死神の帰還

written by hikali

最後の一語を読み上げたとたんに、その娘が泣き崩れたのは、結末が兄の死を書いているからだ。

傍らに控える通訳に署名を求め、報告書が適式の書類になるのを眺めるうちにゆるやかな署名が走り、閉じられ、渡される。

「そのキュディス人の署名も、必要になります」

立ち上がると、長いこと異国の言葉で読み続けた喉の痛みに気付く。

厚い報告書を抱え、豪奢を尽くした悪趣味な執務室を横切りながら、船上での仕事は終わりだと急に気がゆるんでよろめきそうになる。船の揺れが少なくなったのは首都ラスペの内港に入ったからであり、それで醜態をさらすことにならなかったのであるが、それは法で裁かれる刻が近づいていることを意味していた。

(しっかりしろ、リニー)

堅い櫂の椅子を引き、座って泣きじゃくる娘の前に、書類の束を置く。

「署名が必要だ。これが真実であるならば署名を」

「これは兄の不名誉です」

感情を振りまくそのうつくしい娘を見つめ、諦めたように呟く。

「ならばいい。しかし、これは不名誉ではなく、お前の兄は戦いに敗れただけで、堂々と戦ったと書いてある。事実はなかったと逃げ回るといい。逃げ回るということは自らがやましいと認めることだ。自らにやましさがないと分かるなら、現実と戦え」

はたかたのように娘は視線を上げ、わたしの視線を受けると、震える手でペンを手に取る。どっと疲れが出たような気がして、娘をぼんやり見る。北方の大国キュディスでの顛末はこれで終結したはずで、報告書が適式であろうがなかろうが、それが発禁処分となることはわかりきっていた。

木製の、奴隷用のカップを握り、生ぬるい水を飲む。

ひからびた喉をしめらせる。

海鳥の声に気づき、次の戦場がやってきたことを確かめる。

(この娘はなにと戦っているのだろう)

そう想起したときに、自分が抱え込む膨大な戦いの全貌が見えた気がして、吐き気がし、手の中のカップを掴んでいるのが困難になる。

まずは法廷。

そこから海洋の覇権国家シドの闇はどれだけ深いのだろうと、先を読むことはできそうになく、首都ラスペに潜む闇の商人たちとネットワーク、シドの成り立ち、国家がどのように維持されているか、犠牲になっているものたちの嘆き、全貌が明らかになったときに最高権力者たちはどのような処断をするか、と途方もない広がりが見え始める。

娘が、必死の表情で署名する見る。

きれいな指が、厚い報告書に署名していく。

数秒の時間のはずだったが永遠に思える。

そう、軽口をたたいてもいいほど、あっけない膨大だった。

報告書を受け取り、よくがんばったと言葉をかける。なだめる。もう一度、豪華な執務室を横切り、座り、通訳という名目のシド貴族に話しかけた。

「これで終わりだ。さすがに疲れた」

「そ、そうでしょうか？ 読んだ限りは」

わたしは、シッと指を立て、言葉を止める。

「立つ気があるならいい。止めはしない。だが、義務ではないはずだ。わたしの問題だ。それとも戦いたいのか？ 世界と？」

「いえ」

くちびるを噛みしめる青年を頼もしくみる。

「仲間だ。同じものをみている。が、危険は侵すな。門は開いている。焦る必要はない。頼りにしている」

愕然とする青年に微笑みかける。

「しかし、ガスコイン卿。あなたはたったひとりで」

「リニーだ。キュディスでもひとりだったとは思ったことはない。いまも仲間ができた。楽しい仕事だった。この仕事を誇りに思う。だからいまもひとりじゃない」

報告書を見せ、肩をたたく。

船内の誰もがわたしを怖れているのは分かっていた。

32名の水夫たちも、仕える数名の北方蛮族たちも、青年も、わたしという存在は心をわしづかみにする存在であるようで、それは、わたしが切りぬけた絶望的な戦いが、たったひとりの小娘を特別な存在に仕立て上げているようだった。

(借財の形にしては、いい仕事だったか)

乗っ取った奴隷船が唯一の戦利品で、その忠誠は生命を維持する方便にすぎないのだが、ラスペに上陸するまでは手放すことができない安全である。

寄港が近いのに旅装を解かないのはそのためであるし、冷たい声も、貴族然とした態度、軽蔑したようなまなざし、厳しい言葉も、すべては船をわたしの支配下に置いておくための方便であることは否定しない。

100人の奴隷を収容可能な船を、マードックの元部下たちが占拠することの方が正当性があるし、無気力な水夫が結託すれば、それは容易なはずだった。

「御客人」

執務室に水夫長が現れる。冷たい声で話す。

「なんだ」

「接岸の許可が下りました、その」

水夫長の怯えた瞳を、深くみつめる。

毅然と立ち上がり、帯剣したまま、その横を通る。

「罰を受けるのはわたしだ。お前たちには罪もない。それとも、このような船の水夫をしていることを恥じているのか？ ならば恥じろ」

振り返ると、縮み込んだ老水夫の姿があるのみで、それに感慨は浮かばない。

わたしにはまだ彼の地での戦の音が地鳴りのように残っていたし、フードを払えばこびりついた粉雪が舞うような気がした。それでも、甲板で見上げた太陽は南国のまぶしきで、ねっとり肌にとろけつく海風は故郷を感じさせた。

(戻ったか、ラスペへ)

大洋の覇権国家シド。

その首都を海から眺め、フードを脱ぎ、髪がなびくままにして、ふと浮かんだのは、庭には野バラが欲しいというささやかで陳腐なことだった。

財産を売り払って山村に住み、葡萄酒とチーズを作って静かに暮らす。

そのとき、庭に野バラがあるといい。

書物はどうするのか。

それなら神殿を頼って修道女のような日々の方がよいだろうか？

しかし、その神殿に野バラを植えることは許されるのだろうか？

他愛もない空想をし、それより暖かい暖炉の火にあたりたいと願う。

キュディスでの自由交易都市アドレルを巡る争いは心を凍てつかせるには充分で、その苛烈な結末に対する罰を国家はわたしに与えることは自明だった。

(だれか、野バラの庭を欲しいと思ってくれる人が現れるのだろうか)

「リニー、準備はいいか？」

ふいに傍らに少年が立つ。

北方蛮族らしく毛皮を四肢にまとい、いまにも羽ばたきそうなしなやかな肉体で、上空を見上げて風を読む。キュディスの翼竜兵団を支える、生え抜きの精鋭。この少年が求めることは、はっきりしていた。

「復讐か？ シドに対する？」

「そうだ」

まっすぐな視線と、正直な回答に笑う。

「ならば徹底的に行わなければならない。それを遂行するのに、わたしときみでふたりで足りるか？」

「リニーが考え、おれが飛ぶ。足りている」

少年の明快な答えにまた笑う。それならば行こう。微妙な問題が残っているとすれば、それはわたしに反逆罪で死が言い渡されるかだった。飛びたいか？ 飛びたい。この少年と復讐を果たしたい。外套のポケットから、じゃらじゃらと金属音を鳴らす鍵束を取り出して、少年にみせる。

「ならば、飛ぼう」

少年は懐から笛を取り出し、複雑な韻律でそれを吹く。上空から翼竜が甲板に降り立ち、その衝撃で船が揺れる。少年は駆けだし、今にもシドを滅ぼしそうになる。

「リニー！ 報告書が！」

甲板に顔を出した通訳が言う。その真摯な眼鏡顔に、わたしは風にあらがって叫ぶ。

「手続きは分かっているはずだ！ お前に全権を委ねる！ 役所は任す！」

「しかし、貴方は！ まだ、その……、法の判断を仰いでいない！」

ふっと笑う。

「召喚状を提示されるまでは、わたしは自由だよ」

手を振る。乗り慣れた翼竜の背へと歩む。少年の手を借りて、その背に乗り込む。少年は鞭を打ち、翼竜は空高く舞い上がる。

その途端、全身に南国の空の風を浴びた。

2.

キュディアスの翼は、北限の蛮族連合を結びつける、さながら鎖のよう。

戦火絶えない広大な辺境を北方最大の国家たらしめているのは、最強と称される翼竜の兵団。活火山の灼熱と地吹雪の極寒。

蛮勇と規律。

火山神信仰を核に築き上げられたカルティックな翼竜兵団が、この最強国の制度のすべてとなっている。

虹翼の名で知られる精鋭兵団は、キュディアス全土で頻発する争いのために七兵団にわかれ、その独特の装束から「虹」と呼ばれる。七翼のうち一翼が飛べば国が滅び、二翼が飛べば帝都が落ちると語られる。

ホラ好きなシスティア人の弁によれば、かつて衝突した北方二強の一角トランとの大戦で飛んだ翼はわずか三翼で、大戦の原因となった浮遊要塞都市は猛攻を受け、墜ちたという。文字通り墜ちたと。真っ赤に燃え盛る陥落を、大地を引き裂く墜落を、そのシスティア人はその眼で見たと歌うが、トラン・キュディアスの熾烈な大戦は、もう何十年も前の話だ。

信頼できる筋の話では、虹翼騎竜兵団の絨緞爆撃により国境域が不毛の地となったことで、大戦は終結したという。

そう。

たしかに、わたしはその一翼と戦った。

しかし、それは、戦ったと言えるか？

500騎近い翼竜の波状攻撃に自由交易都市アドレルは無力で、それは戦いと言うより、殺戮に近かった。アドレルは上層部のみがごっそりと滅ぼされ、富は灰燼の中に消えた。一般市民を守ったと主張するのは容易ではあるが、それは方便にすぎない。

フードを払い、少年の背中をみる。

ラスペの海上を走り、塔の都市の中に、復讐相手を探そうとする横顔をみる。

純粋な乗り手ではあるが、誇り高く、腕はいい。

「北西に向け、マードックはそこにいる、奴隷市場だ」

「リニー、しゃべるな。上昇する。矢が狙ってる」

少年は翼竜を湾から上昇させ、島々にひしめく街並みから上昇する。それは耐え難い変更で、翼竜の背に身体が潰されるのを奥歯を噛んで耐える。大河クローナに抱かれる塔の首都ラスペは、突如あらわれた翼竜乗りにざわめき、しばらく使われていなかった塔の上にさえ急ごしらえの弓持ちが、にわか仕込みの弓を引き絞る。

(アドレルの顛末が伝わった?)

燦然と築かれた無数の塔たちが、キュディアスの兵団に怯えるというのはおかしい話だ。そう重力に潰されながら思う。

確かに数千キロの距離を飛び、破滅的な翼竜の兵団が現れそうではあるが、彼の地は内紛の制圧に忙しく、それほどの遠征は不可能に近い。ラスペを制圧して利があるのかといえど否であることは明らか。

「リニー、旋回する。北西に向かう」

それより目下、シドを脅かしているのは、ボルニアの兵団のほう。

常勝国家の南進はつい数ヶ月前に確認され、6000を超える大型獣脚竜の騎竜兵団がクローナ河の渡河を敢行するのは間近だと伝えられている。

――血肉で化粧す兵、数万の牙を並べ、鉄鎖の巨脚、大河を越える。

詩人たちはさかんに囁し立て、快速船の通信によれば、鉄鎖騎竜の第二兵団の南進の速度は大だという。

「ならば、河面の水蒸気で一度ホップ、また上昇」

「分かってる。リニー、歯を噛め」

鉄鎖騎竜兵団の15年ぶりの転進。

北隣のジャングルに発生した侵略国家ボルニア。

不可能と思われた大型獣脚竜を操る鉄鎖操竜法は、瞬く間に未開人のすむジャングルに広まり、ひとりの王がそれを統べ、強大な兵団を指揮し始めたのが15年前。北進を続け、古女王国エスト、水郷ザブンテを呑み、北方の二強国トラン・キュディスと国境を接し、遂に転進を決断した。

南には大河クローナと、ほとりに栄えるシドしかない。

(虹翼を恐れても、鉄鎖の牙をまのがれるわけではあるまい)

愚かしさを笑う。

複雑な軌道を描きながら、素朴な表情で少年が問う。

「なにがおかしい、リニー、矢を避けたからか？」

「そうではない。失礼した。降ろせるか？ あそこに降りたい」

わたしが指さすのに、少年は頷き、ちらりとみる。

その眼は笑っていて、自信に満ちて、ラスペなどものの数にも入っていない。それは滅ぼされるべきもので、アドレルのようにリニーと自分で壊滅させる。

瞳に魅了されるように、むりやり笑みを作って、奮い立たせる。

「リニーはシドを創り変える。だから、剣を持っている」

とうとつの言葉に戸惑う。

「剣は剣だ。単なる剣だ。すこしひかる、そして硬い、それだけで、なにも変えはしない。剣は人をわずかに傷つけるだけだ」

「そのものだ、リニーは」

この信仰はなんだと考える。それでも、世界は目の前に現実として広がり、高速で飛び降りるべき地点が迫る。

(シドの剣か)

埃をかぶった伝承では、この国を正すために現れる、裁定者の剣だという。しかし、それは古びた何十年も何百年も、そんな昔はシドにはないのだが、何千年も前の話だ。

スウェスは、剣に誓えといった。

キュディスの大地の巫女であるうつくしい娘は、わたしを庇護者に選び、剣に誓えといった。わたしが誓うと、スウェスは一生が保証されたように安堵した。

(このぴかぴか光るだけの剣に意味があるのか?)

わからない。

それでも、わたしはラスペの石畳の上に立たなければならない。

合図をすると少年は笑う。

わたしは激しい重力にあらがいながら、その強制的な上陸のタイミングを測る。

奔流のような南国の風の中で、わたしは確かにその翼竜の背を離れ、ラスペの石畳の上に立った。

3.

はげしい風圧に競りの声はかき消える。

柱廊に囲まれた、その恥ずべき空間に居合わせた商人たちは、旅装のわたしをみて声を失う。ふたたび上空へと舞い上がる翼竜をみて畏れと恐怖を、睨み付けるとその腕が震え始める。

「ガスコイン卿……、か？」

「リニーだ。その名は嫌いだ。マードックを探している。返すものがある」

まさか帰るとは、そんな小声を無視して、競り市の商人たちの間を歩き、マードックを探す。上空を翼竜は旋回し、危機があればすぐ急降下を始めることは分かっている。

「さきにわたしが着いた。アドレルが甚大な被害を受けたのは事実だが、荷は確保してある。いつか着くはずだ、約束どおりに」

(向かう船があればだがな)

「契約は果たした」

ざわめく市場をつめたく眺める。

マードックがないようであることは、奴隷商たちの態度から明らか。

不法占拠した船の返還をしそびれる。

アドレルを崩壊させた虹翼の意思をみれば、キュディスに船など向けられるはずもない。敗戦の代償として売られるレビ族の身柄は当面の間は安全で、キュディスの地でこれまでの生活を続ける。

「マードックに伝えたかったよ。あんたは支離滅裂で、結果的にだれもが得しない所にたどり着いてしまったとな。くだらないところにたどり着いたと」

軽口を言う余裕はある。

そう伝えてくれと呟き、片手を振り、市場に背を向ける。

汚い仕事の理由は、父がしていた借財のせいだった。

死んだとたんに発生した事態は、莫大な借財をいかに解決すべきかという大混乱で、箱入り娘のように世間と隔絶されていたわたしまでもが駆り出された。婚姻による借財の解消を望むマードックを拒否して、相応の利益をもたらす仕事をするを選んだのはたぶん方便で、きっと世界に対して罪を犯したかったに違いない。

父を憎んでいたし、理不尽な世界を否定したかった。

今となれば、それはショック性の病のようなもので、下すべき判断ではなかったと分かる。しかし、右も左も分からない小娘に、他にどんな手段があったと？

雪が降っていないことに気づき、外套を脱ぎ捨てる。

自分の一生を救った割には、ずいぶんとあっけないものだった。

ふと、気付いて呟く。

「レビは、捕囚の身にあることを認めたよ。それが最大の難関だった」

だれもその言葉を聞くものがないのに、ひとりごとを慎む。

(そういえば異母兄は、だんまりを決め込んだ)

醜い兄を思う。

シドの商船団の5分の1を占めるギルドを牛耳る兄は、この混乱には無口で、財を産むこと以外に興味がなかった。実力者だが自分の富以外に興味がない唾棄すべきシドの汚物で、今頃は破廉恥な無礼講で、同じ穴の貉どものご機嫌を取っているに違いなかった。

とうとつに襲いかかってきた空虚に捕らわれている、と感じる。

戦場の恐怖から解放された代償は、この耐えがたい空虚で、それはわたしの鼓動さえ奪うようにさえ思った。

(キュディスでの日々は幸せだった？ まさか)

「ガスコイン卿！」

忘れかけていた奴隷市場から、声がかかり、振り返る。

「なんだ」

小太りな奴隷商は、下品な髭をいじり、笑みを浮かべて聞く。

「その荷は確かにあるんでしょうな？」

「ないと疑う理由は？」

怪訝に思い、聞く。

「私が聞いているのは、貴方の話だけだ。私が貴方なら、はったりをかます方が楽だと考える。そうじゃないか？」

(なんて、破廉恥な。誇りがいいのか)

「アドレルから戻ったのはわたしだけではない。その者に聞けばいい。妨害はしない」

「長い船旅だ、全員寝取られていても、おかしくない」

ははと下品に笑う男に、殺意すら覚える。

ツカツカと歩き、その鼻がしらにナイフを突きつけてやりたくなる。

「約束は約束だ。どう思おうとそれは果たす。それが商人の信用の基礎なのでは？」

鼻がしらに指を突きつけられた商人は苦笑いをし、言った。

「小娘の戯言だ。この娘は船の船員全員を寝取ったのだ！」

わたしが剣を抜くよりも早かった。

上空を旋回していた翼竜は市場を目指して急降下を始め、その第一射はわたしの目の前で侮辱を繰り返していた男の太股に突き刺さる。続く第二射はその心臓を狙っていたはずだが、わたしの制止で、圧力を伴った風と共にふたたび上昇する。

それを剣の柄にも触れずに、啞然とみる。

男の痛みを訴える声が続く。

「やめろ！ ここはキュディスではない！」

少年は笑ったようで、優雅に翼竜を風に乗せる。

「ガスコイン卿は、キュディス兵を連れこんで、シドの転覆を謀っているのか！」

それは一種の真実ではあるが、事実ではない。

柱廊に警備兵が駆け寄ってくる。

その先頭に歩み寄り、状況を説明する。

「キュディスの兵が矢を放った。護衛だ。危機とみるやいなや放ったのは蛮族なので致し方ない。シドに対する反逆の意思はない」

アドレルからの伝えを聞いているのか、その警備兵たちは柔軟で、海綿のようにすっとそれを呑み込んだ。

「負傷者の心配はいりません」

続々と武装した兵がはいつてくるのを呆然と眺める。

騒ぎ立てる奴隷商たちの間に兵たちが染み渡り、その毅然とした態度で市場の混乱を収めようとする。違う秩序があるのだと示すだけでいい。磨かれ、十分な殺傷力がある矛をみせるだけでも効果がある。

「ガスコイン卿だな、帰還し次第、何をやらかした！」

みると若者（いや、少なくともわたしと同じような年齢だ）が、その鋭い剣をあらわにして、怒気をはらんで歩む。

（シドの剣か……）

その男の持つ剣は、白色の光を帯び周囲を圧倒する。

他人が持つその剣をはじめてみた。

（誰からの剣だ？ 誰が裁定者と認めた？）

鋭い視線を受け流し、軽口に逃れようとする。

「アドレルで起こったことに対する解釈に、齟齬があった。彼はわたしを貶めることに快楽を感じていたらしい。でもそのファンタジーは現実ではなく、単に脆弱な一個人を満足させる、特異な解釈にすぎなかったことは、たぶん明らかなだ、たぶん」

「そんなに難しく言わなくてもいい」

若者はいう。

「事実と異なる侮辱を受けた」

「なるほど。そうか」

若者は笑い、周囲を威嚇するように睨む。得意げに剣を見せびらかし、奴隷商たちをせせら笑う。それは傲慢ではあったが、制圧には有効だった。落ち着きを取り戻す市場を満足そうに歩き回り、兵たちに指示を飛ばす。

群衆にざわめきが起こると、剣を渡した張本人が現れたことを知る。

「大公が」

「まさか、大公がこのような場まで」

その豪華な衣服に身を包んだ姿を見る。大公は笑う。

「戻ったか。ずいぶん荒っぽくなった」

「生きるためなら、誇りを穢さぬ程度に、なんでもします」

大公は笑顔になった。

4.

――リニー、お前は正さなければならない。

10歳にも満たないわたしに大叔父が優しいな眼差しで、しかし厳しい口調で告げたのは、今でも鮮明な冬の暖炉の前だった。炎だけが唯一の照明で、しわが深く刻まれた頬の影を揺らしていたのを、なぜだか憶えている。

――これは、だれにも、見られてはいけない。

背の丈を超えるような剣を抱え込み、頷く。

大叔父との毎夜の会話は面白く、知的好奇心をそそられたのは事実。

今になって思い返せば、その内容は軍学、政治学、哲学、歴史学、語学、数学、と、どれほど広範に渡っていたか不明で、少なくともわたしの血肉を作った事に違いない。なぜレクチャーをしようと思ったのかは結局聞き出すことが出来ず、それでもわたしは大叔父の忠告に逆らって馬鹿な道を歩んだ父より、大叔父を好んだ。

暖炉の側に椅子を置き、わたしが本を読む間、いつでも尋ねていい従者のように大叔父は佇み、尋ねれば分かりやすく答えてくれた。それでわたしは嬉しくなって、あれこれ聞いたのだ。

――なぜ、シドは首竜を守護神としているの？

――どうして、民衆は反乱するの？

――なんで、人は死ぬの？

今では、鼓動は一秒たりとも無駄にしてはならないのだと分かる。

大叔父はにこやかに答え、たぶん焦りと無理もあったのだろうが、ずっとわたしの学びに付き合い続けて数年して死んだ。

大叔父が死んだ時にわたしはひとりきりになったが、それでもひとりきりだと思ったことはなかった。気付くと膨大な大叔父の蔵書が友であり、それを読み尽くしたいと無謀にも思い、もちろんそれは今でも実現できていない。

「アドレルの富の損傷は甚大だな、リニー？」

大公の言葉に我に返る。

それはそうだろう。

「しかし、それは不正の蓄財である気がします。シド商人の名を名乗るに相応しい者たちの蓄財とは疑わしいのです」

アドレルでの商取引など奴隷取引がほとんどで、取引が書類上の正常取引を回避して、裏取引で解決しているのはわかりきっていた。しかし、そのおかげでシド、そしてラスペは成り立っている。

「ふむ、君はどのようにそれを証明するかね？」

やわらかいが厳しい眼差しを見つめ返し、やはり法で裁くのだと納得する。

「荷に税を掛けます。陸揚げの際に品物を検め、商品ごとに決まった税を掛ける。であれば、不正な商品を陸揚げするのは困難になる」

明らかな不正商品を取引する奴隷市場がざわめき出す。

大公はにっと笑うが、視線を泳がせて、ゆっくりという。

「決めるのは議会だ。そして、それで証明できるのは将来の取引であって、過去の取引に不正があったことを証明することは出来ない、そうではないか？ リニー、君はアドレルでの過去の取引には不正な取引が混じっていた可能性がある、そう示唆した」

「灰になりましたが」

「そう灰に。なにもかも過去は灰の中だ。けっこうじゃないか」

わたしは突き放したようにいう大公の言葉を、怪訝に思う。

「けっこう？」

「そう、けっこう。野蛮な人身売買を厳しい法で取り締まるかね？ 莫大な費用がかかる。危険を冒しても利益を取りたい商売なら、この商売は損だと思えるようになるまで、いくら費用がかかると思う？ いまや奴隷貿易はシドの違法な主産業だ、困ったことに」

「たしかに」

あまりにも大胆な発言にわたしの方が困惑を感じてくる。

大公の声はよく通り、広場に集まる兵、奴隷商人、通行人、そして奴隷たちが、しんと聞いています。

「ならば灰にしよう、過去は、そうではないかね？ キュディアスの火山のようにあちこちから噴煙を上げ、降り積もる灰で過去は埋めてしまえばいい。そうではないかね？」

バディアスの愛弟子でもわからんか、と大公は大叔父の名を呟き、真摯な眼でわたしの眼を見る。

「野蛮な取引をするのが馬鹿らしくなるほど莫大な富を産む産業だ、それでだれも奴隷売買しなくなる。想像を絶する富だ。シド商人の誰も掴んだことのない富を、一市民が、そして奴隷であっても掴むことが出来る。絶大な富だ。アドレルの不正蓄財など子供の駄賃にしか思えなくなる、儲かるのだ。持ちきれないほどの膨大な富だ」

ごくりと誰かがつばを飲む。

「また、あの、機械の話ですか？」

「そうだ。たしかにいまはその富をまだ産んでいない。しかし、竜の時代はシドでは終わった。今は鉄の時代。シドの鉱山では、製鉄場が莫大な鉄を産みつつある。数十万の兵の騎士鎧を作れるだけの鉄が、毎月のように生み出されている。潤沢な鉄が、溢れるほどの鉄がシドにはあり、増え続けている。それが次は蒸気だ。蒸気が鉄を金に変える。溢れるほどの金が、信じられないほどの金が、このシドに満ちるようになる」

にわかには信じられず、わたしはため息をつき、なるほどとちいさく呟いた。

「それに、ボルニアだ。あの野蛮な鉄鎖の蛮族ども。なるほど、彼らはたしかに鉄鎖を使う。しかし、それはわずかな鉄でしかない。ほとんどが竜だ。われわれ文明人をあの野蛮な蛮族から隔

絶しているのは何かね？ われらは、石や木や骨から始まり、青銅や鉄に進んだ。次は蒸気と石炭に進む」

(大公はいい人だが、この機械狂いが玉に瑕だ)

大公は広場を向いて、声を張り上げる。

「諸君は何をしているかね？ 物を動かして金を儲けている。奴隷をキュディスからシドへ。キュディスから人を奪い、シドで売る。動かしているだけだ。しかし、これからは創造するのだ。富を動かすのではない、富を創造するのだ。創造は金の泉をシド中に生み出す。世界から奪ってこなくても、無限の金を産む泉が簡単に作れるようになる。蒸気だ。そして蒸気で動く機械だ。無限の富は諸君の物だ。創造し、変えるのだ、このシドを。灰を降らすのだ、キュディスの火山のように。われらは、その方法を知っている。ラスペの、そしてシドのそこいらで噴火が、すぐにでも起こる。起こすのは諸君らだ」

大公は一息に言い切り、大きく息を吸いこんだ。

「創造の日々が、明日にもやってくる。諸君、莫大な富を掴みたまえ！」

信じられないことに、大歓声が起こった。

醜い奴隷商人さえもが、両手を上げて拍手をし、夢に侵された夢遊病者のような笑みを浮かべる。満場一致の大歓声が大公を包み込み、それに大公は笑顔で答える。

「明日の発表を楽しみにしたまえ。明日、創造を産む知識を誰でも自由に学ぶことができる、大図書館の建設の発表がある。文字が読めない者のために音読者も募集する。富への扉は誰にでも開かれている」

それで一層の歓声が沸いた。

大公はわたしを向き、上機嫌から困惑に表情を変える。

「召喚状を渡そう。事前の取り調べがある。そこで証拠を提示することは出来るが、おそらく覆らん。リニーは、アドレルで失った富を賠償する責任を負うことになるだろう」

「そうですか……」

「莫大な額ではあるが、未来から見ればたいした額ではない」

「その話は、なかなか信じがたいのです」

大公は弱く笑う。

「何か面白く、困難な件があれば回そう。それでこの賠償を支払いきるのだ」

それは絶大な額なはずだった。

アドレルに蓄積された富の膨大さを思えば、父の借財など些細なもので、とてもひとりでは払いきれない額のはずだ。しかし、あれはわたしのせいだったのかと、そう反発もする。結果的に失った富を払えるのはたしかにわたししかいない。当事者として残っているのは、わたしとマードックしかいない。

「それしか道がない」

頷く。

「馴れました、キュディスで、なにもかも」

「バディスの眼は、確かだったな。できる限り助ける」

大公は笑顔で手をふり、シドの剣を持つ傲慢な若い男と楽観的な未来へと去り、わたしは広場でひとり取り残される。上空から圧力のある風を伴って翼竜が舞い降り、素朴な翼竜乗りが聞いた。

「リニー、どうするんだ、これから」

「マードックを探そう。でもその前に休もう。やつは逃げ回っている。そう簡単には見つからない。それよりもはらぺこだ。船のジャガイモは飽きたよ。そうじゃないか？ もっと旨いものを食べよう」

翼竜乗りは、にこりと笑った。

「辛くないものもいい。それと翼竜の腸は苦手だ」

あまりにもおかしくて、心の底から暖かくなった。

屋根さえないものには申し訳ないが、わたしには家だと思った場所がない。

それでも父が残した屋敷が確かにあり、山の手の端の、下級貴族がこぞって名ばかりの”山の手”を手にしたがる、一種の貴族スラムに位置している。

東隣島の商売人が店を構える地区にも近く、南の歓楽街にも近い。

それで父が身を持ち崩したのであれば、なるほどと話は簡単ではあるし、わたしは鼻で笑って侮蔑することも出来る。しかし実際は、無理な鉱山投資がその原因のほとんどだったと聞いているし、冷め切った夕食でその儲け話を熱く語る父が、それなりの熱量で家族を温めようとしていたことは確かだ。

5億グロアは堅いと喧伝していた鉱山の上がり、それが確かならば、わたしがアドレル壊滅で受けるだろう賠償額の5倍は超えるので魅力的ではあるのだが、それでも、その鉱山で働く1000人もの労働者の報酬の10倍を超える儲けだと聞けば、さすがに背筋が冷える。

――そんな商売が成り立つとは思えない……。

大叔父の所に入り浸っていたわたしには現実を見る眼がついていたし、父が高利貸しに借りてまでのめり込んでいったのは、異常な姿に映った。

それでも父には、父なりに何か、なしたかった事があったのだと思えば、だいぶ複雑になる。資産を持っていただけのぼんくらとけなすのはたやすい。そしてそれは事実だろう。だが、それが父を掻き立て、無茶な投資でわたしたちを温めようとしていた理由なのだと思いをめぐらすと、だいぶつらい。

あのつめたさのひとりだったのだ、わたしは。

「リニー、まだ歩くのか？ どれも同じだ。あれにしないか？ おれはあれが好きだ」

少年指さして聞くのに、笑う。

「まだ、ついていない。この家はロンダルボンゴ族のものだ、この家はツエケット族のもの。勝手に入れば戦争になる」

「そうか」

少年は賢く笑って、わたしの手をたたく。ちらっと後ろを振り返って、スウェスとその従者たちをみる。親指で指して、あっさりという。

「つかれている。もう半日も歩けない」

「半日も歩くつもりはない」

「たとえだ。リニーも言った。シドにロンダルボンゴ族が住んでいるはずはない」

その少年の目を見る。

アイスブルーの、無邪気な眼を見ていると勇気が湧いてくるようで、心が躍る。調子に乗る。

「そうだ。その通り。代わりにラスペには4000を超える氏族がある。それが部族と同じように違いにいがみ合い、醜い争いをしている。4000だ。わたしも知り尽くせない。ずいぶんキュディスとは違う。でも、それを見たかったのだろう？」

少年の瞳の生気が、また満ちる。

それで充分だった。

わたしは少年がいなくてもなにもかもやれるはずだし、少年は少年で片言のシド語は分かる。キュディスの翼竜乗りなど、引く手あまたなはで、それでも少年がわたしに興味があるのは、アドレルでのわたしの手並みを知っているから。それは再現しろと言われても無理な代物であるのではあるが。

(わたしの側にいても、ろくな事などない)

門に着き、呼び鈴を鳴らすと、乳母が大げさな表情で駆けてくる。

「まあ……、お嬢さま、もどるとは」

「リニーだ」

言葉を失う乳母をみる。その姿は幼い頃の肖像画を見るようで、衝撃を持ってぶれる。あわてて言葉を継ごうとする乳母は愛しいのではあるが、同時にいとましくもある。その非連続的な断層を見つけてしまい、変わったのはわたしなのだと、そう気付く。

「母は息災か？」

「お亡くなりになりました」

そうかと思う。

感慨が湧かないのは、わたしが酷薄だからだと信じたくない。麻痺している、そう信じたい。人の死が当たり前なキュディスにあって、沢山の死と、数えきれない死に直面したから、もう哀しみが機能しなくなっていると。

「帰ってきた。食事がしたい。それに、数名泊めたい。キュディス人だ。連れてきた」

「まあ」

「都合は、」

「それが……」

困惑する乳母の姿を見て動揺する。一年ぶりの帰宅。何があってもおかしくはない。

「ささやかに暮らすぐらいは残したと思うが」

「え？ ええ、お嬢さま。ご親戚にもご親切にして頂いていますし、お金はたっぷり」

眉をひそめる。

「たっぷり？」

「ええ、ですから、事情が……、ございまして……。ご覧頂く方が……」

不吉な予感がして、乳母を押しつけ屋敷に入ると、見慣れたはずのホールが一変していた。なにやら訳の分からないガラスのコップが所狭しと机の上に並び（しかも、父の書斎から持ってきた机だ）、耐えがたい異臭がほのかに漂い、思わず咳き込む。

「なんだ、これは」

乳母は申し訳なさそうにうつむくだけで、途方にくれる。ホールに足を踏み込み、怪しげなガラス管が複雑に絡み合った物体に眉をしかめ、隣の食堂も同じようなものどもに占拠されているの確かめる。応接間の、カオティックにさまざまなものどもが立ち並ぶ中へ入っていくと異臭は強くなる。

ガラスが触れ合うような音が聞こえ、足を踏み出すと、暗がりの中に男の背が見えた。音の発生源はどうやらそこで、異臭もそちらからする。強く咳き込むと、その背が動き、ゴーグル姿の老貴族がわたしをみた。

「この部屋は危険だからはいるなと行ったはずだが……、ゴーグルもマスクもなしに入るなんて、まったく気が知れない」

男はため息をついて肩をすくめ、床に散乱しているのか、並べているのか分からないものどもを踏み分けて近づいてくる。手袋を脱ぎ、ゴーグルを外す。マスク越しにくぐもった声で、最近の若い者は基本書もよまんのか、と呟く。

「アンモニアだ。において分かるだろう。目は大変だし、喉が真っ先にやられる」

「あん、モニア？」

「冷媒に使う。常温で気化するから、冷媒にもってこいなのだが、このにおいはたまらないな。すぐに気化するから、閉じ込めるのが大変で、それで、この部屋だけ閉め切って、生成しているのだが、聞きたまえ、声がかがらだ、粘膜をやられた」

外国語を聞いているようで、意味が飲み込めないが、声が荒れているのは分かる。

（大公と同じ機械狂いか……）

「助手を頼むと言っていたが、こんな小娘、しかも、アンモニアも知らんとは」

「失礼だが、わたしはこの家の主だ。今、キュディスから戻った」

男は目をしばたかせ、しきりに意味を理解しようとする。

「ここでなにをしている」

「見ての通り、アンモニアの生成だ。冷媒に使うとさっき話した。熱循環サイクルの要になる物質で、」

「わたしが聞いているのは、そんなことではない」

「お嬢さま！」

見かねて乳母が駆け寄る。

「このお屋敷は、この方にお貸ししているのです！」

「貸しているだと？」

「はい……」

伏し目がちの乳母は言葉を探す。

「お嬢さまがお出かけになり、奥さまがお亡くなりになり、このお屋敷はどなたもおられなくなり……、今のラスペは空き家をお借りになりたい方で満ちているのです……、それもできれば長期的に……」

「貸したのか？」

「はい……」

めまいがし、立っているのが困難になり、壁にもたれる。やっと言葉を継ぐ。

「いくらだ？」

ああ、とうろたえる乳母に聞く。

「この屋敷をいくらで貸したんだ」

「はい、50万グロアほどで……」

高額ではあるが充分ではない。いくら名ばかりの”山の手”といえども売れば数百万グロアは堅いはずなのだ。

「たかだかそれぼちで」

「いやいや、娘さん、50万グロアは手付け金で、」

鋭く老貴族を睨み付ける。

「リニーだ」

「なるほど、リニーさん、これほどの屋敷、今のラスペでは一千万グロアでも買えないでしょうなあ。何しろ、誰もが研究に使える場所を探している」

「もっと相応しい場所があるはずだ」

暗にラスペの工房地区の事を指摘するが、老貴族は首を横に振る。

「あの辺りは建物が古く密集している、それに狭い。アンモニアを生成することなんて」

「わたしの屋敷ならばいいというのか！」

「十分な金は払っている」

手付け金に50万グロアだって？ たしかに文句の言える額ではない。

「この家は多大な借金を背負っている。それで、いつ払えと？」

「それは心配には及ばん。わしの発明は莫大な金になる。そうしたら、利益は折半、そういう話になっている。わしも研究に莫大な私費を投じている。最近、ガラス管発注でさえ値段が上がっている、わかってくれるな？」

どうもこの老貴族はやりにくい。頭のねじが5本6本は抜け落ちているようであるし、それでいてそれなりに筋は通っているようにも思える。

「なにを作っている。なぜ儲かると？」

「ああ、なるほど。これは空気を冷やす装置でな、アンモニアを冷媒にして、熱循環させる。アンモニアは気化するときには気化熱を奪う、それで空気が冷える。そして、気化させたアンモニアを循環させ、今度は凝縮させる。そうすると凝縮熱が放出される」

何とか理解しようとするが、理解の範疇を超える。しかし、気付く。

「さて、それは違う。空気は冷えない。それは熱を移動させているだけだ」

「ほう。しかしどうかね。気化熱を奪う所と、凝縮熱を放出する所が壁で仕切られていたら？」

「片方が冷え、片方が暖まると？」

「そのとおり」

老貴族は感心したように頷き、わしでさえ三日かかったのにと呟く。

「しかし、それでなぜ儲かるかの説明にならない」

「考えてもみたまえ。こんな暑苦しいラスペだ。冬のように過ごしやすければ、誰でもそうしたい。キュディスに行っていたと言ってたな。涼しくてよかっただろうに」

「キュディスは地獄だ。それに凍えるほど寒い」

老貴族は思案し、別の答えを見つけようとする。

「古の書物には誰もが買ったと書いてある。主に麦酒を冷やすのに使ったと。ああ、麦酒とはエール酒のことだ。エール酒が冷えていれぼうまい」

「冷えていなくてもうまい」

「古の詩に麦酒を謳った詩があってな、夏に飲む冷えた麦酒はうまいと書いてある。大詩人がそう歌っている。抜群にうまいはずだ、そうは思わないかな？」

にわかには信じられなかったが、それでも古の人々の主要技術であったことは確かなよう。

(古の人々はそんなに、冷えたエール酒が好きだったのか？ そんなにうまいのか？)

「では、みせてもらおう。本当に冷えるかどうか」

「なるほど。それは理にかなっているな」

老貴族は厨房へ案内し、複雑怪奇にガラス管が絡み合った装置をみせる。

「火が必要なのだ」

そう言ってかまどに火を入れ、後ずさって、扉を細く開いた状態にする。

やがてゴボゴボと音を立てて液体が沸騰し、なにやらその複雑な物体が動いている様子を見せる。しかし、ミシツという音を聞いて老貴族はあわてて扉を閉め、ボンという爆発音が響き、扉の隙間から異臭が漂ってくる。

老貴族はうんうんと頷き、わたしをしっかりとみつめた。

「研究には失敗がつきものだ。決してめげてはいけない」

ぼうぜんとするわたしが見えないようだった。

「ガラス管の厚さが均質ではない証拠だ。あのガラス屋に頼むのはやめよう」

うんうんと頷き、一步前進したと満足する。

「ま、まて。この猛烈な匂いはどうする」

「いや、匂い以上に有害だ。1週間は近づかない方がいいな」

混乱する。

「いまからここで食事を、それから、休もうと……」

「ここで？ まさか、本気かね」

ねじがない者の相手をするのは苦勞する。

「今、1年振りにキュディスから戻ったのだ、この家に」

老貴族はしばし考える。

「わしの屋敷にしばらくいるといい。ちょうど孫が欲しかった所だ。リニーさんは、話し相手としては充分だし、さみしかった所なんだよ。その召使いは大變料理が上手だ。うまいものでも食べよう。冷えた麦酒よりはうまくないかもしれないけど」

そういうと、翼竜乗りの少年の瞳が輝いた。

シドという国家は300年前に始まる。

東岸諸国の都市国家で起こった王位承継争いが国を二分する混乱に発展し、姉と弟の泥沼の争いが避けられなくなり、王姉は繁栄に満ちる都市を捨てる決断をした。

500隻もの帆船を率い、支持する人々を乗せて西に向かい、6月の後に良港となる地形を見つけ、そこをラスペと名付けた。

その6月と、つづく3年を記録した年代記はいつでもわたしのお気に入り、有効な方策が見つからない、ためいき続きの時は、いつも読んでしまう。

(なぜ、王姉は6月もこの目的地なき500隻を率いれたのだろうか?)

ついで、大叔父に聞けなかった疑問である。

夜着を脱ぎ、正装をする。

わたしの屋敷を占拠した老貴族の屋敷は静かで、不便はなく、頻繁に夕食に出されるポテトスープに難儀しながら、正常に過ごしている。わたしは老人が帰ってきているのを察知して、客人としての最低限の責務を果たそうとする。

迎えると、そのネジが抜けた老人の顔に、幸せの笑顔が浮かぶ。

孫を喜ぶ老人の心境とは、どのようなものなのだろうか?

「リニーさんに召喚状がでている。渡された。明日だ」

その書面を受け取る。

すさまじい攻め句が続く。

厳格な批難を強い字面で並べる。法をめぐるはげしい戦いを伏せたくなる。

それでも、戦いは戦いだ。わたしをアドレルでの唯一の実行者として攻める指摘は正確で、どれほどの矢を突き刺せばいいのかと、疑問に思う。

「明日だ。大丈夫か? つらくないかな?」

「それは耐える」

いつも他人事のようにしゃべる。

「膨大だ、膨大な批難だぞ」

「キュディスではもっと多くのことが起こった」

老貴族はわたしを見る。

「ポテトスープを食べよう。いつでもポテトスープは心を癒してくれる」

「そうですね」

その言葉にはなかなか賛同できないのではあるが、暖かいスープがほっとするものであることは確かだ。食堂では乳母が料理をしており、これまでにない香りがする。

「今日は新作ですよ。豚の燻製を入れてみたのです。それにハーブも」

「おお、こんなに勿体ないご婦人が、雨ざらしになっていたとは」

「まあ、大げさです」

乳母は笑顔で老貴族に応え、わたしにやわらかい笑みを向ける。

「いいにおいだ」

「お嬢さま好みにしたんですよ？」

ふふと笑って、乳母は食卓を用意し、そこに料理を注いでいく。暖かな湯気が漂い、心が安らいでいく。食すと文句なしにおいしかった。心の底からほっとし、自分がいかに安らいでいなかったかに気付く。

「おいしい」

「あら、ご好評」

「うまい。ポテトスープの最高傑作だ！」

乳母は嬉しそうに笑い、スプーンをじゃがいもの間に入れる。そして、そのスープを飲む。満足そうにわたしを見る。そして言う。

「お嬢さまはご立派な方です。きっと世界を変える方です。変えてください」

大叔父から聞いていたなど、ちらと思う。

それは強制される義務のたぐいではない。ただ、備えている人のことを言っているのだろうと思う。それにわたしが合っているのかどうかは、分からない。わたしはなにがしたいのだろうか？

「だれも世界と戦っている。その戦いはどこにでもあるが、とても尊い。すべての戦いが尊い。不正な戦いもある。例えば、他者のものを盗むようなことだ。もしくは、不正をすることだ。でもポテトスープがおいしければ、それで充分。誰だっておいしいものを食べたい」

うまい言葉が見つからず、言葉を飲むと、食卓がしんとした。

わたしがシド最大の加害者になっている事は誰もが知っている。

「そういえば、またガラス管だよ。につくきガラス管、すぐ割れる」

老貴族の助け船に乗る。

「ああ、では、腕のいいガラス職人は頭にありますか？」

「そりゃあ、もちろん。だが、工房がそいつに仕事をさせるとは限らない」

わたしは話が早いと言葉を継ぐ。

「それを雇ってははどうでしょう？」

「わしが？」

「ええ」

「工房を開くつもりはない。これは研究なんだ」

かちんとスプーンを鳴らしてポテトスープを食す。

「でも、ガラス管のことは存じないでしょう？ しかし、金がかかるのはガラス管。それならばガラス管が分かる者を雇った方がいい。そしてガラス管に関してはすべて任せ、失敗したらその者を怒ればいい。ずいぶん楽になります」

「ガラス管の発注のためだけに雇うなんて」

理解できないと眉根を細める老貴族に聞く。

「でも、助手をほしがっていたと」

「それがガラス職人である必要はない」

「助手とガラス職人を雇えば、多大なお金になります。でも、それがひとりなら？」

老貴族はしぶしぶ頷き、わたしを信じられないとばかりにみつめる。

「安く済む」

「それどころか、ガラス管が破裂しなくなる」

翌日になって、山の手の端っこから聴取の場である貴族の屋敷まで歩きながら、このラスペは変わったと思う。

深閑とする屋敷にも毒性の物質が充満しているのではと思うときもあるし、怪しげなガラス管が這っている光景を想像するときもある。

大公の言葉を引くまでもなくこのラスペは酔っ払い状態で、その二日酔いの地点でボルニアの牙が迫ったらどうするのかとは思ふ。

（金がすべてなのか）

そう、金がすべてだ。

しかし、ラスペの司法は案外健全で、その総代理にリドリーを選んだ。面識はないが、公正な人物と知っている。クローナ河上流の運河建設の推進で名を挙げた人物で、ラスペを抱え込むクローナ河の水運で財をなしている。

広大な敷地の前に立つ。

「召喚状を」

「お待ちしておりました」

門が開き、わたしは5分の散歩をする。

複雑な邸内を歩き、その裁判官殿に面会する。ゆっくりと椅子に座る姿は、威厳とやっかいごとに満ちていて、たいへんに難しそうだった。眼鏡をずらして言う。

「卿はたくさんの問題を起こした」

「リニーだ」

すこしだけ肉付きのいい頬が緩む。

「そう、リニー卿？」

「いや」

リドリー卿は笑む。

「私は誰でも、最大限の敬意を示したい。それはどんな苦境にあってもだ。不快かね？」

「いえ。尊敬を」

そこから続く攻め句は適切で、刺さるよう。

「しかして、アドレルの損害の問題はどうあれ、それを払えるのは、いったい誰が残っているのだろう？」

「払います。わたしがすべての責任において」

リドリー卿の細い目が緩む。

「君は2億グロアを払うと誓った。払うかね？ 莫大な額だ」

「払います」

「わたしは払えない。すさまじい額だと思っている。それでも卿は払うと？」

「払います」

ふたつ目の言葉で、あきれたよう。

そして楽しそうに笑う。

「卿はもうちょっと国の寛容性に想像力を働かせるべきだと思うし、善意というものはもしかすると存在するのだとしてみるべきだと思うのだが、どう思うかね」

「善意は示されれば、受けます」

ため息をついてリドリー卿は執事を呼び、大量の紙とペンを持ってくるようにいう。

「では、証拠を調べなければいけない。卿の証言が必要だ。話してくれ。書き留めよう」

書記を呼ぶ声に思わず聞く。

「いえ、報告書は書き、そして届けたはずですが？」

リドリー卿は不思議そうに首を傾げた。

「いや？ 来てないが？」

キュディスを思い返すと、執務室に粉雪が舞うような気さえする。

「寒かった。おそろしく。凍えるようだった。今でも寒い」

リドリーは興味深そうに首をかたむけ、同情するように頷く。

アドレルから、中堅部族であるバルケ族首領への書簡を携えて、案内役とふたりで雪原を歩いてたわたしは、五騎の尾根沿いの街道に行くレビ族の隊列を見た。

「従属部族であるレビが、バルケ族の領地を侵そうとしていた」

「堂々と尾根をかね？」

「ええ、なぜあれほど目立つ行動をとったか、わたしには分からなくて」

リドリーは考える。

「示威行動とは、賛同者に対してリスクをとってみせる事で成り立つ。本気だと示すには、後戻りが出来ない事をするのはなかなかいい手だ」

「そうか」

記憶に鮮明に残る光景が、解きほぐされるように、きれいな糸の束になる。

彼らの気持ちが分かった気になり、なにが起こっていたかが、染みこんでくる。

「それで、遠方から観察していたのです。しかし、案内人が氷を踏み抜いて河に落ちた。それで、その尾根を行軍していたレビ族に気付かれて。尾根から騎竜兵が降りてきた」

「どうやって切りぬけたかね？」

「なにも。おそろしくて、逃げることも出来ず、威嚇の矢が飛び、やってきた騎竜兵に話しかけたのです。自分は使者だ、アドレルからバルケ族の首領に信書があると」

「適切だな。私でもそうするだろう」

「しかし、その騎竜兵から語られたのは、一斉蜂起でした。バルケ族の従属部族、力強きヘイト、賢きチルダ、素早きロンダルボンゴ、そして聖なるレビが四方からバルケ族の集落を目指していたのです。バルケはなくなる。だから信書は意味がないと」

いまでも、そのはげしい血塗れの戦いの音が聞こえてくる。

いくら、キュディス有数の翼竜乗りを擁するバルケ族でさえ荒れ狂う吹雪の中で風前の灯火に思えた。雄々しい盾角竜に騎乗するレビ族の戦士たち。無骨な鎧と斧。高らかな声が聞こえてくる。

――その賢い口を閉じろ、おんな！ レビの戦士は進軍を始めたら、敵を打ち破るまで止まらぬのだ。

「虹翼が動くのを怖れました。そもそも虹翼はこのような部族の争いの、調停のためにまずもち
いられる、鉄槌なのです。その圧倒的な戦力で瞬時に争いを止める」

「いかにも。使者ごときでは、止まらない」

「そもそも、首領の病を原因に始まったバルケ族の内紛が発端なのです、いえ」

リドリーは視線を上げた。

「後に、計算が合わないと気付きました。つまり内紛の勃発よりも、レビのほうが早い」

「偶然ではないとすれば、内通者があったと？」

「ああ、いえ、そう。信じられないかも知れませんが、彼の、その、この事態の黒幕の狙いはアドレルだった。アドレルは奴隷売買のために内乱を煽動していた。武器を無償で従属部族に配っていた」

「バルケ族内に、自らを落としてまで、アドレルを叩きたい者がいたと？」

「そのとおり」

ため息をつく。

「しかし、信じがたい」

「ええ、その愚かさを見事というほどに突かれた、策略だったのです」

ふっと笑い、リドリーは言い直す。

「私が信じられないのは、どうやってその難局を乗り切ったのか、ということなのだ」

わたしはしばらく考えに迷ったのであるが、ひょっとして目の前の裁判官殿が、得ている名声以上に上質な人物であるという事に想像をめぐらせる。それは、理解の範疇外にあった。

(何と聞けばいいのだろうか?)

「ひとことで説明できる類いのものではありません」

(この人は分かるのだろうか?)

「卿の冒険譚はとても楽しい」

思わず笑う。

「リドリー卿、あなたは話し甲斐のある裁判官殿だ」

「光荣だな」

リドリーはやわらかく笑い、運ばれてきていた茶を飲むようにうながす。甘い香りが溶けるようで、喉に匂いが染みていく。書記に手短かに指示をするその声は堅く、この執務室で日々やりとりをしている言葉が想像できる。秩序ある正常。ラスペがリドリーを裁判官に選んだ理由が分かるような気がした。

「あなたのような人には初めて会いました」

リドリーは手を止め、怪訝そうな視線でわたしをみる。

「卿は、自分がたいへんな人物だということが分かっていない。それに対処できる所に出番が回ってきただけだ」

「ご迷惑でしたね」

頬を緩めて笑う。

「楽しくはある。続きを」

それにうながされるように、物語が湧き上がってくる。

「レビの尋問は続きませんでした。すぐに気付いて戦いの笛が響き、あの導き手たち、つまり翼竜乗りですが、彼らが3騎で空から攻撃を仕掛けてきた。あまりに見事で言葉もないのですが、瞬時にレビのふたりの騎竜兵の命を奪った」

「キュディス兵は強いかね？」

にっこりと笑ってしまう。

「通っている名に恥じません」

「それは、こわいな。卿にはキュディスの内通者との声も上がっている」

「まさか」

確かにキュディス人を何人も連れこんでいるのではあるし、アドレルの上層部が壊滅した状況下では、怖れるのも無理はない。しかし、キュディスがシドを取ってなんの利があるのかと問えば自明なはずで、その利を問うのも馬鹿らしくなる。

「キュディスにシドを取って、なんの利が？」

「アドレルは墜ちた」

わたしは抵抗する。

「アドレルは墜ちたのです。そこには、滅ぼそうと思う者が現れる。墜ちれば、滅ぼされる。シドは墜ちますか？ アドレルのように？」

しばらくリドリーは考えていたが、肩をすくめて、すこし笑う。

「分からんよ。大公の言うように、欲が徳となる時代が来るかも知れない。知り合いに大金持ちになりたいと言っている機械いじりはいないかね。それとも、皆から賞賛されたいと言っている者だ。富を創造したい者だ」

わたしは、突き動かされるように危険な研究を続ける老貴族を思い出し、頷く。

「莫大に儲かると。信じられませんが」

「信じたい者と、信じられない者の役割は等価だ。私にもわかには信じがたいが、荷の動きが活発になるならば準備をしなければいけない。すこし信じ、大部分は信じない。もし誰もが信じたとしたら、たいへんではないかね？」

「そうですね。たしかに」

茶を飲むと、すこし安心している自分に気付く。言葉の通じぬ異国で、同じ言葉を話す旅人に出会った気分。それはわずかに落ち着ける心地だった。

「導き手、つまり翼竜乗りですが、彼らは信書を携えている事を聞き、集落まで運ぶと言ったのです。しかし、集落は割れていました。首領の息子と、首領の弟でバルケ族は真っ二つに割れていたのです」

「なぜだね？」

「息子は事故で脚を怪我し、二度と歩けない身だったのです」

リドリーは考える。

「歩けないからといって、割れるかね。誇り高き部族が」

「え？」

わたしは思わず口に出す。それは盲点だったのだ。

たしかに歩けなくても兵を率いた将はある。

(なぜ気付かなかったのだろう)

「つまり、なぜバルケ族は割れたのだろうか？ 割れることを望んだわけではあるまい」

「いえ。そうです。その通り」

リドリーはすこし笑み、それは次回の宿題としよう、と話し、書記たちを退出させようとする。わたしは慌てた。

「待って下さい。なぜ、建国の女王は500隻もの船をまとめられたのでしょうか」

リドリーはしばたきをし、一度立った席に座る。

「争いは、取り分をめぐる起こる。得をしたいと思うから起こる。しかし、シドの女王は500隻の誰にも一切の取り分をみせなかった。たどり着かねば、それは死だとさせ言った。すべての約束を拒絶し、すべての者に貢献を求めた。ラスペにたどり着いたとき、電撃的に提供された貢献のすべてを朗唱し、それに相応しい地位を公平に与えた。非常に卓越したやり方だ」

ちいさく頷き、頬が緩む。

「ずっと聴きたかったのです」

「私に？」

「いえ、相応しい人に」

リドリーはほのかに笑った。

「明日来たまえ、また話を聞こう」

「いえ、諸用が」

マードックを探している旨を伝えると、リドリーは眉をひそめる。

「たしかに卿は彼の仕事をしていたのだったな。あまり感心しない仕事だが、時と場合がある。周囲に聞いておこう。なにか分かるかも知れない」

リドリーはそう言って立った。

はたして、あの分厚い報告書はどこへ行ったのか、そう思わない日はない。

壊滅からの数ヶ月、青年と作り上げた労作であるはずだった。

(提出をし忘れるはずはないのだが)

輝きを持った瞳を思い出す。

多才な才能が花開くのを待っている、つぼみをたくさんつけた大樹。

現実や欲に溺れないだけの、泳ぎきる力があると思ったのであるが。

それでもわたしは毎日、リドリーの講義に通うのはとても心躍ることで、鼻歌を歌いながら、歩速がそのリズムに合ってしまう。街角の目新しい展示物を見て、足を止める。それは新しい旋盤であったり、奇っ怪なガラス管であったり、多いのは織機と服であるのだが、色彩豊かな服と値段を見ていると、時間を忘れる。

「お嬢さんどうかね、すてきなウールだ、お似合いだ」

「あいにくだ」

手持ちがないことを示す仕草をするのが、日常になっている。

リドリーの屋敷にたどり着くと新しい今日が始まる。

「まずは、宿題から入ろう」

リドリーは書記に目配せをし、執事に茶を用意させる。

それで、いつもどおりの時間が始まる。

「彼、つまりタイビはアドレルが搾取的であることに疑問を抱いた。それはアドレルを通じてシドにキュディスの富が奪われ続ける状況で、その状況を作るためにアドレルは画策していると。であれば、虹翼の制裁を発生させるべきだと」

リドリーは笑って、確認的に聞く。

「それは、自らの部族を失うリスクを侵してもかね」

「ええ。わざと不利な局面を作ったと」

肩をすくめるリドリーを見る。

「すさまじいな。彼は強かったかね」

「十分な相手でした」

明らかな敗北を喫した相手に賞賛以上の恨みはない。それでも思うのは、負けを予定されている状況を作られることで、深さが、深いので、どこまで掘ればいいのかと、思ってしまう。

いつものことを聞く。

「報告書の提出はありませんでしたか？」

「ないな」

それで、講義が始まる。

ふと気付いたように、リドリーは顔を上げる。

「そうだ、昨日、船商人が面白い事を言っていた。取引のある商人なのだ」

目の前の裁判官殿が、シドの流通の大動脈を仕切っていることを思い出させる。

わたしはカップを止め、ことなげに話すリドリーを見る。

「エレナ通りの、ミズリーの店がある辺りにある大きな屋敷に入り浸りになっているらしいのだ、彼をよく見ると。ああ、マードックの話だ」

愕然とする。

まさかそんな所へ行かなければならないとは。

リドリーはわたしの様子をふしぎそうに見て聞く。

「知っているのか？」

「ええ」

覚悟を決めるのはすこしの時間が必要だ。

「義兄の屋敷です。商人たちの賭場なのです」

武装商船が必要なのは海域には賊があるからなのだが、その船主や船員たちも、実のところそれとたいして変わらない。

荒くれで、下品で、危険が好きだ。

”シド海軍”と揶揄される荒くれ者たちは、ときに集団して海賊を避け、ときとして他国船団を略奪し、ときとして海戦の主役となる。シドが海軍を持たないのは、すでに私設の海軍があるからで、公式には帝国の群洋第三騎竜兵団の、魚竜の騎竜兵団が航路の安全守っていることになっているが、群洋第三は実戦経験のない新兵の訓練兵団だと言われてもう長い年月がたっている。

名だたる海賊団と戦うのは主に第一、第二。

シドの航路を守っているのは、なるほど義兄の一派ということになる。

そのヤクザ的なポリシーを飲めるのであれば、そう思うしかないのであるが。

義兄が束ねるシド商人の一派はそういった者たちであって、それは出来れば近寄りたくない者たちである。海の用心棒と思えば、心強いとも言える。

「リニー、家族の所に行くのに、警戒が必要なのか？」

護衛が聞く。

「悪いシド人がたくさんいる。なにをしでかすか分からない」

きょとんとして、少年はわたしを見る。

「殺していいのか？」

「いや、だめだ。殺す直前で刃を止める。それで相手は降参する」

「バルケの戦士はその程度では降参しない」

「大丈夫だ、シドの商人は臆病なのだ」

街を歩くと注目を浴びる。シド風の服を着せてはいるのだが、プラチナブロンドの髪と、透明に近いブルーの眼は隠しようがない。それが帯剣していれば物々しい。弓は得意と知っていたが、剣はどうなのだろうと、どうでもいい感慨が浮かぶが、少年が充分であることだけは分かっている。

「入場証を」

門兵に止められる。

「リニーだ。義兄に、リニーが来たと、それで通るはずだ」

とうとつにばたばたと門兵は取り乱し、ひとりが深閑とした広い敷地へと走っていく。

「死神だ、死神だ！ 死神が来た！」

「なに？」

「厄介者が現れたとき」

くりっとした瞳を動かし、少年は分かったように頷く。

「どうぞ、許可が出ました」

頷きながらその門兵の目を見返すと、わずかにうろたえる。それを喉の奥で笑い、ずいぶんいいようじゃないかと感心する。

義兄は財産の八割はカードで巻き上げたものだと吹聴するギャンブル好きで、屋敷にはカードだけでなく無数の賭け事を蔓延させて、仲間たちを喜ばせている。賭け事の対象はカードから船荷にまで広がり、実際の船の沈没にまで賭けられているという。

商人たちはそれが便利であるのだと、わずかな掛け金で船が沈んだときの損害に備えられるというのではあるが、目を血走らせたギャンブラーたちがささやき合い、その札の値を決める取引をしている様は、大金を賭けたカードの勝負と違いがあるようには見えない。

帯剣した用心棒が大きな櫛の扉を開くと、紫煙と酒精の匂いがたちこめている。

ホールに滞留する商人たちが、わたしをみ、口々に死神とささやく。

その中を歩き、マードックを探す。

「いいか、なにがあっても殺すな、ぜったいだ」

「わかった、気をつける」

大広間へ入り、いくつものカードテーブルとそれに群がりギャンブルに熱中する商人たちの間を歩く。流行りのゲームはラミー。義兄が一番強いカードゲームだ。

(ずいぶん懐かしいゲームが流行るものだ)

声がかかる。

「どうだ、姉ちゃん、賭けないか？ 掛け金がないならあんた自身を賭けてもいい」

船主らしい男の前に座ろうとすると、声がかかった。

「ヘインズ、やめておけ。リニーのカードの腕前はおれ並みだ。ケツ毛までなにもかも剥がされるぞ。一度やられかけたときがある」

見ると、あいかわらずの気取った髭と精悍な顔つき、すこし老けたようには見えるが、それはお互い様だろう。義兄はくっくと笑う。

「たいそうな仕事だったな、兄として誇らしいよ」

「死神だって言って回っているのは、義兄か？」

「いや、おれには妹を神としてあがめる趣味はない、そうだろう？」

くつろいだ様子で座り、大きな身振りで話をする。

「どうやら、金の無心に来たのでも、稼ぎに来たのでもないようだな」

「マードックを探している。常連だと聞いた」

困ったように肩をすくめ、葉巻に火をつける。

「顧客の話は出来ない、そうだろう？ 寝取ったキュディス兵を連れているならば、なおさらだ」

周囲から嘲笑が湧き上がる。

それは義兄なりの配慮だったのかも知れない。傍らの男が下品に同調する。

「なんたって、船ごと寝取ったらしいからな」

(ばかな男だ)

「リニーに対する侮辱は許さない」

少年が颯爽と抜刀し、広間が騒然とする。騒ぎを聞きつけて衛兵がやってくるが、そのあわてふためきように義兄はあきれたように呟く。

「リニーが連れているんだぜ、リニーより剣の腕が上なんだ。こんなちんけな屋敷の制圧など、あつという間だろうよ」

少年は風のように動き出し、剣を交えるまでもなく、そののど元に切っ先を突きつける。それで怖じ気づいたのを蹴飛ばし、次の衛兵ののど元に剣を振り上げる。

「これでふたり。何人殺っちまうんだろうねえ」

「血は流さないと話した」

「それはそれは」

少年はけもののように広間内を飛び回り、騒然とする中をひとりひとりののど元を狙っていく。

キン、と初めて刃が交わる音が響き、少年ははじめて前進をやめ、床にしゃがみ込んで、すこしは腕の立つ用心棒をみつめる。剣を逆手に持って力を蓄え、飛びかかり、肘をみぞおちに入れて、肘を起こすとその切っ先が用心棒の鼻がしらをかすめる。

「つ、強すぎる……」

余興として少年の立ち回りは商人たちを惹き付け、掛け金を叫ぶ声までが聞こえる。

義兄はふっと笑い、いい腕だと呟く。

たぶん義兄が、生まれて初めてわたしの眼を見た。

「マードックは大の演劇好きだ。とくに悲劇だ。残酷な奴らしい。そうだろう？」

充分だった。

「どうやら、わたしは死神らしい」

つたないキュディス語でそう告げると、目の前のうつくしい娘はとまどった。

キュディスの大地の巫女。

世界を予言する、聖なる存在と言われる。

ほっそりとした指から、痩せた首から、赤らむ頬から、目の前の少女がその資格に相応しいかと考える。どう思うか尋ねる。

「死の神……、ヤール神のことですか？」

スウェスは白い首を傾げ、アイスブルーの瞳でわたしをみて、にこっと笑う。

それで気を許してしまう。

老貴族の屋敷は深閑としていて、ふたりの言葉だけが、唯一の言葉。

一歩出ればシド語に満ちあふれるその部屋を、せめてわたしがいる時間はキュディスの言葉で満たしてやろうと思う。

キュディス語は難解で、覚えたてのわたしは、パズルのように頭を使う。

「ヤール神はたしか……、火山神？」

「そうです。死を司り、滅ぶべきものを滅ぼします。火の柱。ですが、ヤールさまのお怒りは、信心なきもの、おろかなものに対するお怒りで、決して気の赴くままに火の柱を立てるのではありません。日々大地の声を聞き、賢く避ける。賢いものはヤールさまのお怒りを受けず、おろかなものが滅ぶのです」

「それは怖いな」

火山の国の知恵を聞き、苦々しく笑う。

水差しを持ってうつわにそそぎ、それを口にする。乾燥させたレモン粉を添えるのがわたしの好みだが、スウェスは熱い茶を啜った。

(これが冷えていれば、スウェスも水を飲むのだろうか？)

そんなどうしようもない問いを抱え、いつも決まって茶を入れるリドリーを思い返す。

(冷えたからって、うまいわけでもない)

「わたしがヤール神であるはずない。怒りを受けるべきちいさなひとりだ」

スウェスはふっと笑う。

安堵したように腕を伸ばし、背筋を伸ばし、それからおいしそうに茶を飲む。嬉々として言う

。

「そうでしょう。シドの剣の主はわたしごときの言葉にはまどわされない。だから決断ができるのです」

「リニーだ」

「そう、リニー」

スウェスの笑顔は、この半年変わったことがなく、いつでもわたしに正解を教えてくれる。それは、理不尽な理解に基づいていて、なぜ、このキュディスの大地の巫女が、正解をくれるのか

がよくわからない。

それでも巫女殿の言葉は新鮮で、いつでも風が吹いてくる気さえする。

「あなたは、なにもかもを変えます」

なぜそう思うのだろうと、いつも思う。

「そんなに簡単に世界が変わったらたいへんだと思わないか？」

「それでいいのです」

言葉を失う。

キュディアスの大地の巫女は神聖な存在で、キュディアスを束ねる精神的な支柱である。だれもが巫女に聞き、キュディアスの秩序はなっている。

虹翼騎竜兵団の制裁と、巫女のさとし。

それが、北方蛮族をまとめているキュディアスであるとの弁もあるが、正直な所、よくわかっていない。目の前に、その本人がいてさえも、よく分からないのだ。

「第一、金がないどころか、大借金を負っていることになっている」

苦笑すると、嘔み付いてきた。

「それはいくらでもついてきます」

「ほう、それはなにを目当てに？」

スウェスは微笑んだ。

「ついてくるのです、あなたに」

スウェスをシドに連れてきた名目は報告書の証人としてだった事は否定しない。

しかし、従者としてついてきたキュディアス人たちがそうであるように、他の理由があるのは明らか。翼竜乗りの少年のように、スウェスの護衛名目で、シド見たさで来た者もあるが、その大半は奴隷となるには忍びない者たちである。

バルケ族に、辺境の盟主であり翼竜乗りを輩出する誇り高き部族に、従属部族を煽動して反旗を翻し破れた聖なるレビ族は、首謀者として苛烈な罰を負うこととなった。

(スウェスは、なぜ、シド行きを望んだのだろうか？)

争いの禍根を断つために、部族ごと奴隷として売るのは、キュディアスでは日常茶飯事。

それが、たとえ大地の巫女を輩出する聖なる部族であってもだ。

(拒めば連れてこなかったのに)

これが一連の紛争の最終的な結論だった。

スウェスはまずいことに、レビ族を煽動した者の妹にあたる。

族長の娘、大地の巫女の卵、長老である老婆。

そんな者たちがスウェスに付き従い、マードックの奴隷船でシドの首都ラスペへ避難したのは皮肉な話だ。

ふいにポテトスープの香りがし、階下で物音がした。

「……は、あなたが熱消費と労働生産との間にある関係話すのを聞いたとき頭が二度と休まることのないほどの強い感銘を受けたんです。それにトイナー。彼が熱機関の理論を書いたとき、これこそと思ったのです。ぼくにとって全研究のどんな他の部分だって応用熱力学ほど意義のあるものはなかったですし、これからも変わらないと思います」

「トイナーはわしも読んだよ。しかしな、ガラス職人さん」

「だから、ガラス管だけの仕事はたくさんなんですよ！」

(この屋敷の主が、ガラス管工を見つけてきたのか?)

「なんです？」

ふしぎそうな目を向けながらシド語を聞くスウェスは首を傾げた。

(騒々しいことになりそうだ、なかなか血の気がある)

「どうやら、老貴族の助手候補殿は熱血漢のようだ」

「ガラス屋さん、見つかったのですね」

「そうらしい」

わたしは急いで部屋着から正装に着替えて、主を迎える準備をする。

「しかしな、職人さん」

「ぼくにはフランツという名前はあります！」

ためいきが聞こえてきそうだった。

「しかしな、フランツ。現実には簡単ではない。きみはまだ厳しさが分かっておらんのだ。いいかね。いかなる職業といえども、この職業ほど自然の理法や現実と常に一致していることを強いられている職業はない。分かるかね？ 正しそうに見えても、動かない機械は動かない。動かないのだ、呪いの言葉を投げて、けっして。それは迷信じゃ」

「はい」

わたしはスウェスに、すぐ戻るとささやき、扉を開ける。

「いいかね。いかなる職業においても、この職業におけるほど間違いなく、非真実と虚偽が処罰される職業はない。わしはアンモニアを使う。ガラス管はすぐ割れる。その結果がこうだ。アンモニアは有害だ。こんながらがら声になってしまった」

「はい」

ゆっくりと階段を降り始めると、声は鮮明になった。

「医者は数千の人間を殺しても尊敬を浴びて一生を終えることもある。学者は最大の誤謬でもそれが誤謬とわかるまでは、死ぬまで勝ち誇って主張することもある。裁判官は不正を擁護して名声を獲得することもある。分かるかね？」

「なるほど」

「我々にはそれは許されない。この職業ではそれが出来ないのだ。真理に背く技師は、半ばにして自分自身の罪に砕かれる。道徳的には罪のない者が、誤った基礎の上に打ち建てた技術的冒険の結果、内部崩壊する姿をわしは大量に見てきた。文学ではこれほど見事に、これほどきっぱりとは崩壊しないだろう。しかし我々はいとも簡単に崩壊する。そういう世界じゃ、その覚悟があるかと聞いておる」

だまりこったのを聞き、案外よい青年ではないかとわたしは無責任に思う。

「我々は自然の理法に容赦なく結びつけられていて、否でも応でも真実でなければならない。縛り付けられておる。がんじがらめじゃ。容赦はまるでない。ゼロだ」

「だからいいのです！ 誰も嘘をつけない、けっこうじゃないですか！」

震えるように叫ぶ。

「もうあの世界はまっぴらなのです！ もっと純粋に生きたい、あなたのように！ あのうす汚れた世界はもういやなんです！ あそこで生きたくない！ 助けて欲しいのです！」

わたしが階下に降り立ったとき、青年はそう大声で叫んでいた。

思ったよりもひょろとした青年で、燃えるばかりの瞳が爛々と輝いていた。職人が着るポケットのたくさんあるベストを着、麻の作業帽を被っていた。

その汚れだらけの姿を見て、思わず口を出した。

「そう、こう言うんだ。ぼくはあなたの助手にはなるが、ガラス職人はまっぴらだ。助手にしてくれるのならば、ガラス管は担当してもいい。簡単だ」

わたしの声に青年は驚いて、視線を向ける。

数秒、青年（たしかフランツだ）はわたしを凝視した。

しかし、すぐに表情を固め、老貴族に食い下がった。

「ぼくはあなたに頭を殴られたんです。だから、仕事がしたい。でもそれは、応用熱力学の仕事でないと駄目なんです。ガラス管職人として一生を潰すのはいやなのです。あなたの仕事を継げる人間になりたいんです」

老貴族は深く感銘を受けたのか、黙りこんだ。

フランツはさらに爆弾を投げた。

「それに、娘さんを一生幸せにできる。そうすると約束します」

老貴族は戸惑って、わたしに視線を投げる。

「娘さんをください！」

10.

たたずむ老貴族が、よろよると歩いて椅子に座り、言ったのは意外な言葉だった。

「フランツ、きみはそうできるかも知れない」

わたしが口を開こうとするのを制し、続きを話す。

「リニーさんの旦那になれるかも知れない。しかしそれは未来にある。現在にはないのじゃ、わかるか？」

フランツは、目をしばたいて老貴族を見、わずかながら頷く。

「そうじゃ。意思だけでは到達は絶対に出来ない。偉大な業績を何か思い浮かべてみるといい。建国の女王の偉業でも、ボルニアの興隆でも、まだ見ぬ蒸気機関の実現でもいい。偉大な業績とは常に実行された意思なのじゃ。婚姻は偉大な事業だ。婚姻は決して純精神的な産物ではなく、意思と現実の世界との闘争の結果にすぎない。フランツ、きみが思うより前にリニーさんと婚姻したいと、同じような意思が他の人々の念頭にあったとは思わないかね」

フランツがわたしを向き、燃えるような瞳で見つめた。

「たしかに」

老貴族は楽しそうに笑い、わかってきたな、と呟く。

「両者の意思と、完全なる婚姻との間には、婚姻に必要な仕事と苦難の時間が存在する。常に燃え上がる意思の小部分しか現実の世界には押しつけることは出来ないし、また常に、完全な婚姻は、本来精神が見た、決して達しえぬ理想とは全然別の相貌を呈するものじゃ。それゆえいかなる男女も未聞の不評を受けながら仕事や恋愛や生活に従事する。達せんがためには、多くのことを欲せねばならぬ。最後に残るのはその最も小部分なのじゃ」

「……はい」

「従って婚姻するとは、無数の誤謬の皮を剥いで取り出した正しい関係を幾多の失敗と妥協を経て实际的結果に帰すことなのじゃ。それ故に男女はともに楽観主義者でなければならない。愛の力の全衝撃力は本人たちの魂の中にだけあり、この者たちだけが実行の聖なる火を持っているのじゃ」

老貴族はいじわるっぽくわたしに笑いかけ、うなだれる青年を頼もしげに見る。

(すまんな、けしかけてしまった。あとは任せる)

そうとでも言いたげだった。ふと聞いた。

「フランツを助手として雇うのですか？」

老貴族は困ったように髭をいじる。

「まだ決めていない」

「なら、お雇いになることを希望します」

老貴族は面白そうに好奇な視線を向ける。

「ほう？ それは？」

「ご存じのように、我が家には莫大な借金があります。そしてあなたとは、得た利益は折半という約束だったはず」

「たしかにな」

「ですが、その利益が生まれる前にあなたの寿命が尽きてしまうという、あまり考えたくない怖れがあるのも事実」

困ったように顔をしかめる。

「彼は、フランツはあなたの仕事を継ぎたいと。そうなれば、何十年かかろうと、たしかにその莫大な借金を返す望みは見えてくる」

「ふむ。しかし研究成果はちゃんと公表する。誰かがわしの研究のあとは継ぐ。わしの研究は決して無駄にはならない。誰かがわしの骨を拾ってくれる。後継ぎは必要ないのじゃ」

「我が家の莫大な借金は？」

老貴族はだまった。

「フランツとやら、わたしはリニーだ。きみが研究に参加するのを歓迎したい」

「ありがとう……、リニー」

フランツは難しそうな顔でわたしを睨み、わたしはそれを出来るだけ誠実に見た。

「きみは知らないかもしれないが、わたしには莫大な借金がある。それはそれはとても莫大な額だ。まずそれを知って欲しい。婚姻関係になればそれはきみに降ってくる」

「そ、それぐらい。ぼくが返してみせる」

わたしは頼もしくてふっと笑った。

「2億グロアだ。その半分ぐらいかと思っていたら、水増しされていた。シド有数の大金持ちの知り合いがいる。彼でさえもそれは返せないと言った」

「に、2億グロア?!」

くすりと笑う。

「そう、めったに背負える借金ではない」

どう思うかとじっと見ていたら、フランツは武者震いをした。

「やるさ、やらないとリニーはぼくを認めてくれないんだろう？」

「いや、きみに迷惑がかかる」

「どっちでも同じさ。大丈夫、応用熱力学には未来がある。リニーを救う未来だって、そこにはあるはずだ」

はっきりと言い切るフランツを見て、これはシド中で起こっている事なのだろうか、夢でも見るように呆然と思う。名もなき青年が現実に絶望し、世界を作りかえる未来に唯一の希望を見ている、そんなふしぎな光景。

わたしはフランツの瞳をみながら、そんな未来をみた気がし、ふと気付いて、なぜあれほどまでに裁判官殿がわたしに協力的なのかが分かった気になった。

愕然とし、心が震え始める。

(わたしは、フランツのように、やると言えるのだろうか?)

11.

それからわたしは、マードックを探すふりをして、ちいさなフランツを探すようになった。街のささやきに耳をすませ、すこしは会話をし、たまには長話をした。

ラスペはかすかに変貌するきざしをみせ、なにか変わろうとする気配があるように思えた。相も変わらず、花とチーズとワインに満ちあふれ、パンの小麦の香りが漂い、銀行は金を貸し、荷馬車が近郊から新鮮なたべものを載せて行き交うが、それでも銀食器やら、カットグラスやら、絵画を並べる店も増え始めている。

街路を行き交う人たちがときおり流行の服を着ているのは、そこが貴族の行き交う通りだから。冷やかしながら、もうなにか、贈り物でもと考えるのをやめたのは、招く相手がシド屈指の金持ちであり、最高権力者と目されている人物であるからだ。

大公はわたしを救えない事によほど負い目を感じているようで、さまざまな事業家に紹介する。

しかし、会うのは亡き父のような貴族であり、家格は立派で、振る舞いは上品であるのだが、その情熱は莫大な金へと向かう正真正銘の商人貴族、今日までフランツのような者には出会うことはない。

ラスペに立ち並ぶ数々の塔を見上げる。

その昔、頻繁に発生する党派争いの暴動から身を守る建物として、貴族たちはこぞって高い塔を建てた。しかし、やがて貴族たちは商人となって国外の富を奪うことに熱中するようになり、林立する塔は稼いだ金の、いや、奪った金の額を誇示する為にその高さを競うようになった。

(果たしてこの辺りでも、暴動が起こっていたのだろうか?)

大公はこの人通りの多い、貴族たちの事務所が建ち並ぶ街路に面した場所に、図書館を建てるという。老朽化した聖堂で、現在は病院として使用されている建物を壊して別の島へと移し、その跡地に新設すると。大公らしい大胆な計画だが、ラスペを急ピッチで変貌させようとするその姿は、高い塔を次々と建てる商人貴族たちに重なった。

しかし、どんなに高い塔を建ててもラスペで最も高い塔にはなれない。

ラスペの中心に建つ古代よりある塔は、セントラルと呼ばれて威容を誇る。

まだ誰一人としてその塔がどれほど高いのか調べた者はなく、下の方を政庁舎として使用しており、このセントラルはシドの象徴であると同時に、政治の中心地となっている。

もし、貴族たちの塔が暴動から身を守る最後の砦として機能したのであれば、ラスペという都市は難攻不落であるはずだが、そのようにこの塔を見る者はない。シド人たちの中に、狂信的に古代の知識を復活させようとする者が多いのは、ラスペにあれば、セントラルを見上げるだけで、その偉大さがいやがおうでも実感できるからだ。

誇らしいセントラルと共に生きる国。

それがシドであり、この国を覆っている技術再生の熱気。

「すこし遅れましたか？」

大公の執務室は静かに落ち着いており、にぎやかな先週ではない。大公はにやっとわらい、ラ

スペをみるのはいいだろうと言ひ、時代は速いと言う。

「きっと速すぎるように見えるだろう。バディスはそういう男だった。どうだ？ リニー、見解が聞きたい」

「ええ、まあ」

あいまいに答える。

「誰かがゼンマイを巻かなければならない、それを誰かが止めようとする、バランスが取れる。リニー、君は思う存分止めてくれていいんだ。バディスのように、遠慮はなしだ。誰も止めてくれないならば、安心してゼンマイを巻けない」

「御意」

大公はとつぜん怖い顔をして、わたしを睨んだ。苛立たしげに言う。

「バディスはそんなことは言わなかった」

不機嫌さに眉をしかめるが、すぐにぱっと太陽のような無邪気な笑顔を向ける。

「そうだな、君がもっとも信頼を寄せ、共に戦う戦友のような人物はだれかね？ その名はなんという？ それは誰だ？ 答えてくれ」

「フランツ」

思わず口に出していた。

「いい名だ。私はフランツ2世だ。そう呼ぶ以外は許さん、私をフランツ2世と呼べ」

「しかし、」

大公はいじわるそうに笑う。

「私は光栄だ。それでリニーの信頼を寄せるNO.2に、名前だけはなれる」

「しかし、フランツは職人です。ガラス管職人で、」

「なおいじゃないか。他に真似するものがない。私のNO.2の座は安泰だ」

嬉しそうに薄めた葡萄酒を飲む大公をみて、この人物がなぜこのシドで最高権力を誇示しているのかが分かったような気がして、背筋が震えた。それでも、大公がフランツ2世に見えてくるような気さえして、マジックに翻弄されているようにも思えてくる。

「しかし、」

「しかしばかりじゃないかな？ 今日。"しかし税"を取りたくなった。議会に諮ってみよう、あのなんの結論も出せない議会に、もう少しは意味のあることを求めることができるだろう。"しかし税"か。なるほど、これはいいかもしれない」

しらばっくれる。

「ですが、」

「"ですが税"が今制定された。議会の会期で成立できるだろうか？」

考えれば考えるほど、大公をフランツ2世と呼ぶのに、非合理性がない。

たわいのない言葉遊びのようにさえ見えるが、わたしには大公をフランツ2世と呼ぶことによって、なにかが決定的に変わってしまうように思える。そこまで大叔父と大公の友情を信じているのかと言われれば微妙で、少なくともわたしはその姿を見ていない。

(しかも、その後釜に座らせようとしている?)

「その壊れた状況に私は立ち向かうだろう。だれかが立ち向かわなければならぬ。そうしなければボルニアに飲まれる。分かるかね？ リニーをエスケープゴートにしなければならぬのは、それを出来るだけ遅らせるためだ。奴隷貿易の是非は必ずシドを真っ二つに裂く。内戦状態でボルニアの牙が迫ればどうなる？ たいらげてくれと言わんばかりだ」

「はい」

「しかし、遅れたとしてもいずれ来る。もう始まっていると言ってよいほどだ。シドはいちど壊れ、嵐のような混乱に突入する。その壊れたシドに君が必要だ。側に君にいて欲しい。リニー、君だけが、その予想される混乱を治められる、嵐の女王だ」

真剣な大公の視線をじっと見つめ返した。

「まさか」

「君の認識は重要ではない。リドリー卿の調書は読んでいる。それでも信じないかね？ たしかにキュディスの辺境とラスペでは混乱の規模が違う。しかし、あれほどの局面を乗り切った者は、君以外いないのでは？ リニー？ 私でさえ経験がない」

背筋が震え出すのが分かった。

大公は現場を任せられる人間が欲しいのだ。そして大公は大局を見る事に集中する。くっきりとしたビジョンが鮮明に見えた気がし、壮大な未来が自分に迫るのが分かった。

(大公は、わたしがこんな小娘であると分かっていない？)

大きく息をする。

(大叔父の代わりに、わたしなどに？)

「フランツ2世の頼みだ。私は戦うだろう、そのときリニーにも一緒に戦って欲しい」

大公はやわらかく笑った。

「まさか、御意、と答えるつもりではあるまい？」

その笑みにフランツの燃えるような瞳が重なった。

「武者震いをするほどの覚悟はありませんが」

はっはっはと大公は大げさに笑い、そのフランツという者に会ってみたくなった、と呟き、得意げに執務机の引き出しを開ける。

「見てくれ、大図書館の設計図が仕上がった。見事な出来だ。室内の装飾はキンブリーに頼んだ。荘厳なやつをいつものようにやってくれるだろう」

机に設計図面を広げ、楽しげに計画を話す大公の横顔を見ながら、この人はどの程度までの未来まで見えているのだろうと、呆然と考える。きっとわたしが見えているのは数手先までで、現場を任せるのにはその程度でいいのであろうが、大公のような大きな人物に出会うと、その矮小さに愕然とする。

(キュディスも結局読み切れなかったしな)

「叔父上」

「なんだ」

ふいに室外から声がかかり、大公は緊張して表情を引き締めた。

カツカツと兵団のブーツの音を鳴らして、帯剣した青年が入る。腰に下げるのはシドの剣。奴隷市場を制圧した傲慢な青年だった。わたしをにらみ、ふんと鼻を鳴らす。子供のようにさえあるが、大公がシドの剣を渡すほどであるから、その目にかなう者なのだろう。

青年は簡潔に告げた。

「また、ザブンテ難民どもが、暴動を起こしました。今月に入って3度目です」

12.

「鎮圧しますか？」

「いや」

迫るような青年のことばを、大公は制止した。

「沈静化だ」

「同じに聞こえますが」

「違う言葉だ」

困ったようにちらりとわたしを見るので、しばし考える。

「貴公はキュディスに行ったことは？」

「いや、ない」

青年が興味深そうな視線を向けるので、言葉を継ぐ。

「キュディスは蛮族どもの国だ。貴公はザブンテ難民を同じような蛮族であると思っているだろう。では、キュディスではどのようにその蛮族どもを統治しているのだろうか？」

「虹翼だ。あれほど強力な騎竜兵団を持てば、だれもその秩序に従う」

「そう、それが鎮圧。非常に有効で重要。虹翼はそのためにあると言ってもいい。キュディスの分裂を難く戒める鉄の鎖。まさに、虹翼騎竜兵団はそのためにある」

青年はふしぎそうな顔をする。

「では、沈静化は？」

「キュディスの統治の両輪にあるのは、虹翼と、もう一つ、大地の巫女がある。火山神信仰の中樞に大地の巫女はあり、彼女たちの役割は蛮族どもにさとしを与えること」

「さとし？」

「大地の教えを、蛮族どもに教えるのだ」

とうとつに、はははははと、青年は狂ったように笑った。はっは、はっはと痙攣するようでもあり、ヒステリックでもあるように、大げさに笑う。もしかしたら、ほんとうに可笑しいのかも知れない。

「大地の教えだって？ ははっ、そんなものを信じるのはたしかに北方蛮族らしい。しかし、そんなものがラスペで通用するか？ 沈静化は大地の教えを伝える事？ まさか、それで、ラスペが動くかよ！ 叔父上はおれに異国の怪しげな教えを説けと？ あのザブンテ難民どもが行儀よくなる？ まさか、おれはあいつらが秩序を乱すのを、必死になって抑えてきたんだ。それがいまさら、おまじないか？ ははっ」

大公を見ると、申し訳なさそうな瞳で見返す。

「そうじゃない」

「は？ どうするっていうんだ？」

「彼らの認識を一掃するのだ。たったひとことで。それが大地の巫女のさとしだ」

青年は、迷うが、みせてもらおうという心意気が変わる。

「ザブンテ語だ。なにを言っているか分からない」

「話せる。大丈夫だ」

青年は溜飲を下した。

「おまえは犯罪者だ。それもとびきりの」

沈静化に向かう路上、青年は啞然とする部下を前に、罵詈雑言をわたしに浴びせた。

「北方のシドの権益であるアドレルを無力化させ、その指導層が皆殺しになるのをむざむざと見過ごした。奴隷商人たちの儲けを、将来に渡って全損し、アドレルの富は奪われた。しかもそれは、キュディス蛮族と協力関係にありながら、虹翼の、第四、第三？」

「黄の兵団だ。第三兵団」

「そう、第三兵団の出動を許した。おそろしいほどの失態だ」

攻め句浴びせる青年の瞳をじっと見る。

「とても正確だ。文句がつけようがないほど」

「その結果、生じた損害が2億グロアだ。シドはおまえの不手際で、2億グロア失った。いや、それは直接の損害であって、間接的な損害はもっと大きくなるはずだ。シドからそれだけの富を奪い平然としている。罪の意識がないのか。おまえがしでかした莫大な損害をなんとも思わないのか！」

叫ぶようなので、ひとこという。

「うらやましいか？」

青年は逆上する。

「あたりまえだ！ シド全体を揺るがした！ でかいことだ」

「それは絶大な罪だ。わたしはそれを背負っている」

ムキになって言う。

「いや、違う。それはシドの罪だ。おまえが勝手に背負っているだけで、それに叔父上もおまえに背負わせようとしているが、それはおまえのものではない。それはおまえの報告書を読めば誰の目にも明らかだし、おれは疑わない」

(報告書?)

大公といい、この青年と言い、わたしのキュディスでの所行を知りすぎている。それは船上で書いた報告書なのか、リドリ一卿の調書が出回っているのか分からないのではあるが、大公の言葉が脳裏によぎる。

――遅れたとしてもいずれ来る。もう始まっていると言ってよいほどだ。シドはいちど壊れ、嵐のような混乱に突入する。

ぶるりと身体を震わせるが、ラスペの臓腑たちの絡み合いまでは想像することは出来ず、ぐちゃぐちゃとしたその姿を想像するのは止めることにした。代わりに、目の前の青年に言葉を投げる。

「そんなに、でかいことをしたいか、貴公は？」

「ああ、そうさ。あんなクズどもにはけっしてできない、ばかでっかいことがしたい。あのおべっか使いや、陰謀やろうども、あんな醜いやつらのいいなりになるのは、おれはいやだ。頭を押さえられるのは、まっぴらごめんだ。やつらはなにをしている？ ただ金を動かしているだけだ。それに汚い政治だ。貴族ってだけで、どうぞよしなに、だ。馬鹿じゃないのか？ あんなのがおれたちを支配している。ぜったいにぶっつぶしてやる。すべてをぶっ壊してみせる。なんにもかもだ。あいつらに馬鹿にされるのはいやだ」

わたしは激昂する青年をほれほれと見つめ、すこし心を許した。

(フランツがいた……)

「おまえには、それをやるだけの正統な理由がある。だれもとがめない正しい理由が。おまえはいつでも奴隷貿易のために戦える。それが羨ましい」

わたしはしばらくぼんやりしていた。

「名を聞いていなかった」

「ファウストゥス・ヴィエランティウス・ヴィトゥルーヴ・ロイボルト・マルクス」

くすっと笑うと、青年は赤面する。

「どれが気に入っている？ それで呼ぼう」

青年は視線をそらし、小さく、ロイボルトと呟く。

「ロイボルト、立派な名前だ。恥じる必要はない」

「な、名前なんて！ そんなのどうでもいい。立派なのはおれ自身でいたいんだ。勝手にこんな名前を押しつけやがって」

「ロイボルト、わたしたちの間では、貴公はロイボルトだ。それ以外は見ない」

「失礼ですが、近衛兵団長」

会話に割り込むように、衛兵が言葉を挟む。気付くと周囲を固める衛兵たちはわたしたちのやりとりにやきもきしているようであり、それだけを見てもロイボルトを慕う衛兵は多いように思えた。

(近衛兵団長？ そんなに高い地位をロイボルトに？)

「なんだ」

「ご指示を」

ロイボルトは、周囲を固める衛兵たちを見て、表情を固める。

「暴動の発生箇所はセブル橋付近だ。まずは拡散を防ぐ、ダイネリとミズビーの通りを閉鎖。続いて、セブル橋に反対側から向かう、船を使え。なるべく姿を見せろ。近衛兵団が動いていると誇らしくみせろ。余裕があれば、ミゼル方面を見回れ。見回りは重要だ。犯罪を防ぐのは見回りと言っていい。上手く行けばボーナスを、大公にせびる口実が出来る」

それで、衛兵たちは歓声を上げる。

多少、大公の懐を心配したのではあるが、ロイボルトが近衛兵団を掌握しているのは明らかだった。口を開く。

「それで、近衛兵団長殿、わたしたちはどうしますか？」

ロイボルトは顔をしかめる。

「勝手に主導権を渡すな。おまえが考えると言ったのだから、考えろ。というか、どう沈静化するかがぐらひはもう分かっているんだらう？ 近衛兵団を動員して、結局解決はリニーかと思うと惨憺たる気持ちになる」

言っではいけない言葉は、褒美はあなたに行くようにします、近衛兵のためにその報酬があなたに回るようにします、だった。それは高貴で、フランツのようなプライドを潰す。

調子に乗った。そう後悔するが、言ってしまう。

「誇りに思う、最高の近衛兵団長だ」

ロイボルトは険しい視線でわたしを見た。

セブル橋にたどりついたとき、暴動は最高潮に達していた。

ザブンテ難民は熱狂し、石を投げ、叫んでいた。

「第一旗、右から裏通りを制圧せよ！ 第二旗は左だ！ 聖堂がある。ぜったい占拠されるな！

第三旗、第四旗はおれに続け！」

ロイボルトはわたしを見る。

「なにかあるか？」

「ぜったいに殺すな」

「絶対に殺すな！」

眼を見るともうちょっと欲しがっていたので、荒れ狂う叫び声の中、言葉を継いだ。

「暴動者に褒美をやる。声を聴かせろ。聴く用意があるし、褒美を出す」

「正気か？」

聴くので、わたしは答える。

「褒美はわたしが出す」

「どうやって？」

くっくと笑いながらもロイボルトは乗り気だった。

「しるか」

ロイボルトは調子に乗った。

「ザブンテ人に告ぐ！ 暴動の罪は問わない。それよりも要求を聞かせろ。声を得れば我らは褒美をやる。どうして欲しいのか教えるんだ！」

高らかな声はラスペに響き渡る。それは近衛兵団のすべてに染み渡り、兵団の高圧的な鎮圧は止まる。

「訳せ」

わたしは同じように、ザブンテ語で叫ぶ。

「君らの声が聴きたい。わたしはザブンテ語が分かる、近衛兵団に属するものである。きみたちの不満を調停する役にある。暴動の罪は問わない。声こそすべてだ、暴力ではない。まず要求が聴きたい。要求が分かれば褒美をやる」

騒然としていた市内が収まった。

「異国語を話す者たちを、同国人と同じように扱うことは出来ない事は許せ」

当たり前な事を言うと、反発があった。

「言葉じゃない！ シドは、ボルニアの牙を守る気があるのか！」

「そうだ！ いまにもボルニアに飲まれる国家は、このシドだ！」

「騎竜兵だ！ ザブンテの民を守るのは騎竜兵だ。騎竜兵を増やせ」

騒然として、湧き上がった声はまっとうな言葉だった。

(こんなことで争っていたのか...)

愕然とするのではあるが、争いとは所詮そんなものだ。

「なんだって？」

「シドは、ラスペを守れるのか。ザブンテの民を守るのは騎竜兵だ。増兵しろ、だ」

「勝手なことを」

ロイボルトはあきれたように肩をすくめるが、わたしは続けていう。

「諸君らの要求はもっともだ！ しかし、いささか勘違いをしている。確信を持っていう。ボルニアはシドに勝つことは出来ない！」

一瞬の静寂が、すぐさま怒号に変わる。

「6000騎の獣脚竜だぞ！ 打ち負かせると?!」

「どれほど高慢なんだ、シド人は」

「ザブンテが、弱小だとでもいいたいのか!？」

両手を上げて制すると、それは消え去った。

「説明しよう」

呆然とみるザブンテ人たちをながめ、一呼吸置いた。

「わたしは、ボルニアはシドに負けるとは言っていない。勝てないと言ったのだ。鉄鎖騎竜兵団を打ち破る必要はまったくないのだ」

口々に言う。

「そうか……。戦わなければいいのか」

「どうすると？ 従属するのか？」

わたしは出来るだけ慎重に話す。

「ラスペはクローナ河に抱かれた都市であり、各島繋ぐ橋を落とせば難攻不落になる。戦いは陸上をめぐる争いから、河をめぐるものになる。ボルニアに河を制する水竜の兵団は？ シドにはある。首竜はシドの守護神、河を制するのはシドだ。これで数月は持つ。数月もあれば帝都より援軍が着くだろう。古サウスの伝統を受け継ぐ、海竜の精鋭兵団だ。常に海賊との実戦にある精兵だ。クローナの守りは万全になる」

黙して聴く者たちの瞳が希望に輝き始める。

「それにセントラル。最後の砦は、果てしなく高い。いざとなればザブンテの民を守るだろう。できる限りの物資を持って立てこもれる。これでも不安か？」

静まったのを見て、ロイボルトが聴く。

「なんと言っ、その、沈静化したんだ？」

「ラスペは難攻不落だ。ボルニアに落とせるはずがない」

「はは、そんなの当たり前じゃないか。シドではだれも議論しない」

「ザブンテ人にはその常識が分からなかったのだ」

ロイボルトの笑いを見て安心したのか、ザブンテ人たちがざわざわと話しはじめる。どうも、籠城に必要な物資を確保する方法を話し合っている。わたしは言葉を継ぐ。

「ザブンテの残存騎竜兵が知りたい。共に戦うものがどれほどいるか知りたい。だれか詳しい者はいないか。我らはザブンテ人がシドと共に、生存のために戦うと信じる」

ざわめきが広がり、ゾンバルト兵団長はどこだ、と口々に囁かれるうちに、橋上のひとりの周囲が邪魔にならないようにと、退きはじめ、ひとりの男を遠巻きにするようになった。男は大声で言う。存外に若かった。

「ゾンバルトだ。貴公をなんと呼べばいい？」

「リニー。大公の代理人と思ってよい。わたしの言葉は、大公の約束だ」

不敵にゾンバルトは笑う。

「そんなにうつくしいと説得力がないな。どんな事をした？」

「キュディスより戻った」

それでまたざわめく。

「それはそれは、死神のガスコイン卿がこんなにもうつくしいとは」

「リニーだ」

「失礼、リニー。ザブンテの残存騎竜兵の正確な数は知らない。350までは数えたが、いまだにちらほら合流してくる」

(350騎？ そんなに残っているのか)

「内訳を聴こう。水竜の騎竜兵は何騎残っている」

「150騎ぐらいまでは戦力になろう」

「ボルニアとの戦いの経緯を聴きたい。手短かに話してくれ。詳しくは後に聴く」

ゾンバルトは眉をしかめた。

「おい！ なにをしている！ なんの話をしている！」

「ザブンテの残存戦力を聴いている」

ロイボルトはかっとう血を頭に上らせて、わたしの襟首を掴む。

「なんの権限があつてだ！ だれがおまえを指揮官にするといった！」

「大公に言われた。私が戦うとき、おまえも一緒に戦えと。わたしは責務を果たしているだけだ、キュディスでの経験をシドのために使えと。ザブンテの騎竜兵団は大公直轄になるだろう。それをだれに任すかは大公が決めることだ」

「お、叔父上が、そんなことを？」

「大公に聴けば分かることだ、くだらない嘘はつかない」

ゾンバルトは苦々しく話す。

「ボルニアは、ジャングルよりとつぜんにザブンテの野に攻め入ってきた。なんの予告もなく。存じているとおり、ザブンテはジャングルが切れた氾濫原に広がる、牧歌的な国だ。治安を守っているにすぎない騎竜兵たちは、各個に撃破された。主の里が食い破られるのはあっという間だった」

「それで全部か？」

「全部だ」

それは恐ろしかっただろう、それがまずはじめに浮かんだ感慨だった。そして、それは純粋な驚きでもあった。

(それで、350騎が残っている？)

殲滅することは容易な状況だったはずだ。

わたしは意を決して言う。

「わかった。まず言おう。ザブンテの民よ。貴公らは敗者ではない。そのような状況で生き残るのは極めて困難だ。シドの精鋭であっても困難であろう。しかし貴公らは、ここに、ボルニアの鉄鎖騎竜を、6000騎の大型獣脚竜の兵団を鼻で笑うように、ここに、ここに生きている。貴公らは、精鋭であり、ほとんど勝者に近い。そしていつかはザブンテの野からボルニアの牙を一掃し、故郷を取り戻すだろう」

うつむいていた顔が上がる。

「シドは共に戦う者への友情と、手厚い支援を惜しまないと約束する。今、シドは、ラスペはここに共に戦う友人があることを確認した。そして、ここに精鋭騎竜兵団があることも確認した。ボルニアの南進に立ち向かえる戦友がいることを認識した。これまでの非礼は詫びよう。なんどでも、詫びよう。ただし、シドはボルニアの牙と戦うだろう、勇猛に。しかしその時、ザブンテの民にも戦って欲しいのだ共に。そして勇猛に！」

大歓声が沸いた。

だれもが立ち上がり、絶賛の拍手をし、浮かれたように喜びの声を上げた。

「なんだ？ なにが起こっている」

わたしは、あらいざらいを包み隠さず話す。ロイボルトはしかめ面をながら頷く。

ゾンバルトがささやかな拍手をする。

「あなたは話の分かる、このシドで唯一の相手だ。指揮官殿、いや、死神リニー」

これだけは、訳さないことにした。

13.

「ずいぶんな活躍だったらしいな、卿は」

豊かな茶の香りが広い執務室に染み渡るまで待ってリドリーは、慎重に切り出す。

「商人たちが騒いでいる。大公派はザブンテ人を取り込んだと」

「わたしは大公派ですか？」

聞くまでもなかった。リドリーの怪訝そうな視線を受け、思いなおす。

「大叔父のようにはなれません」

「盟友だと思っているはずだ。たいそうな喜びようだった。私の雲雀だと」

「ヒバリ？」

リドリーは茶をすすり、あきれたように笑う。

「雲雀は晴れだ。雲雀が高く飛べば空が晴れている証拠だ」

ああと頷くが、どうもリドリーが思っているよりは深刻ではなくほっとする。

わたしは軽口を言う。

「小鳥でいいならば、いくらでも飛びましょう。気楽なものです」

「そのつもりで言ったのだろう」

裁判官殿とのやりとり今日が最後のはずで、かわされた膨大な会話は調書となり、裁判の資料となるはずだった。さすがに名残惜しくもある。この目の前にいる卓越した人物と別れるのは忍びがたかった。

(公正で、客観的で、紳士的。ほとんど狂いのない方だ)

一級の人物であることは間違いなくて、これほどの人物に裁判を捌いてもらうのかと考えると、それだけで得した気分になる。記念になる。それが、たとえ自分に不利な判決を下す本人だったとしても。

「ザブンテ人の要求はいったい何だったのかね？ これが伝わっていない」

「シド人は、ザブンテの民を守る気があるのか。増兵せよ」

視線が合ってどちらともなく笑う。

「どう、対処したかはだいたい想像がつく。答えは、ザブンテ兵がその最先鋒だ」

「いえ。それもたいへんよい筋ですし、そちらで解決してもよかった」

片鱗をみせられる。

「あなたは、ちゃんと重要な地位にいるべきなのです」

「雲雀が飛ぶのを邪魔する気はないのでな」

実際には、ラスペが難攻不落であること、ザブンテの残存兵力を聞き、その残った経緯を聞き、ザブンテ兵を鼓舞した経緯を話す。リドリーは頷き、笑う。

「荷の動きがいいのは、ザブンテ人のせいかな。金になりすぎて困る。船を増やさなければ、そういう状況ならばな。これからも立てこもりに必要な物資を集めそうかな？」

「ええ。たいそう怖かったですでしょう、祖国が征服されていく過程は。恐怖が原動力です。動きは止まりません。いくらでも払います」

リドリーは満足そうに頷き、しばし考える。

「どこかに限界が来る」

「そうです。どこかに資金的な限界が来ます。それがどこなのか誰にも分からない。ザブンテ人がどのようにシドに浸透しているのか、誰にも」

「言葉も通じない」

「しかし、今やザブンテ人たちは、シドを構成する一部です」

リドリーはにこやかに笑う。

「荷の動きを支配するようでは、なおさらだ。学ばねばならない」

真剣に考えるリドリーをみていると勇気が湧く。シドの実務層は案外健全で、話せば通じるのではないかとは思ってはいたのであるが、後に、この目の前の裁判官殿が希有であったと言うことを思い知らされた。偶然ではあるが、いや偶然なのか、もしや大公がわたしにリドリーを出会わせたのではと思うのではあるが、その出会いには感謝する。

(大公ならばそこまでするだろうか?)

分からない。

そこまで考えていないかも知れない。

裁判官殿は調書を取る気がないのか、書記に退出を命じた。召使いを呼び、茶を入れさせ、それを楽しそうに啜る。歌うように聞く。

「増兵には応じないのかね? ザブンテ人の要求は増兵だった。それを卿は湾曲的に拒否した。増兵はないと?」

深刻な問題だった。

「資金の無駄です。それは、結果的にシドを弱めます」

「しかし、それでは航路の安全が守れない。クローナの航行に危険があれば、ラスペに流入する物資が途絶える。それを黙認するかね。私は船を手配する。しかし、船が全損する危険には備えられない」

健全な話だった。

「ボルニアの鉄鎖騎竜がクローナ河の流域に満ちたときに、どのようにシドはその国家を守るのか、というお話ですか?」

「そうだ」

ずいぶん先走りな話には聞こえたが、裁判官殿の心配は納得がいく話でもある。

「はっきりといえるのは、いくら積んでも、ボルニアの鉄鎖騎竜には勝てないということです。何十倍に増やしても無駄でしょうね。勝てないならば、増やしても意味がない」

「負けることを容認するということかね?」

「いえ、勝てなくても、負けないと」

「そう、そうだったな」

リドリーは、茶を飲む。

「シドは滅びてもいいのです。歴史を見れば滅びた文明はいくらでもあります。それはよいことではありません。ですが、不正がはびれば、当然に滅びます。滅ぼす者があるから滅びるのではありません。滅びるべきだから、滅ぼす者が現れるのです」

「ほう？」

「しかし、シドは強い。信じられない数の人々が、立ち上がろうとしています。それがシドです。今のシドには力がある。強いのです。無敵といってよいほど。立ち上がろうとしている。ここから黄金期が始まると、わたしは思います」

リドリーは苦笑しながらため息をつく。

「大公派の最先鋒だな」

「そうでしょうか」

「大公の口癖は、こうだ。『彼は世界を変えることが出来る。一つの雄大な真理、一つの実際の明白な真理が私の眼前にある』 卿にもそう見えているのではないのかね？ それはほんとうだろうか？」

わたしはくすりと笑う。

「あなたは、大叔父の役割を果たすのに適任ですよ。まるで大叔父みたいです」

リドリーは咳払いをしたが、あきれたように言う。

「ゼンマイ巻きを卿にも任したいとは思わないな。ゼンマイ巻きが多すぎる」

「わたしは巻きません。事実を確認しているだけです」

ふと手が止まる。

視線を執務机に落とし、リドリーは考える。

「たしかに卿の証言はその通りだった」

それからしばらく考え、視線を上げる。

「増兵はそんなにも非現実的かね？」

「ええ。シドの主力は白鎧騎竜兵団の500騎。それに辺境にまんべんなくいる首竜の兵団をかき集めてもせいぜい1000騎。平和時にはこの程度でよいとしても、6000騎の鉄鎖騎竜兵団を迎え撃つとなれば、さすがに不足しています。増兵とはなにを意味しているのでしょうか。ボルニアの兵団と同じ数にする？ 4倍です。莫大な資金が必要どころか、そのほとんどは新兵です。3／4が新兵に埋め尽くされた軍隊を想像してみてください。烏合の衆に成り果てます」

リドリーは、表情を沈める。

「どうするかね？ ひきこもるしかないと？」

「白鎧は精鋭です。6000騎と当たるには遊軍として使うしかない。局地戦で、ゲリラ的に使えば、局地局地では勝てるでしょう。真正面からぶつからないことです」

ぎろりと睨む。

「しかし、クローナ全域を守れるわけではない」

「そのとおり。ですが、ボルニアの牙はクローナ河には届きません」

「事実だとしても、それを誰もが飲むかね、怖れは連鎖する。ボルニアとて馬鹿ではあるまい。周辺の陸上領土を落とすことで、水運に圧力を掛けるだろう」

とても難しい兵站の話をする。

どうなるかは、正直読めなかった。

「読めません。どうなるかはまったく分かりません。ですが、あなたが想定している事態よりもよい状況を提示できます」

「ほう？」

「ザブンテの水竜兵団を護衛につけることは出来ます。シドの首竜の兵団は護衛にむきません。船足より遅いからです。ですが、ザブンテの兵団ならどうでしょう？ クローナを先導することぐらいはやすいでしょう」

リドリーは考える。

「卿は、ザブンテの敗残兵が精強兵だと言った。それは事実かね？」

「水竜は保証しかねるのですが、陸上は確かです。しかし、もとよりザブンテの兵団は陸上よりも水竜の方が地位が高かった。水郷ザブンテです。彼らのアイデンティティは水竜にあります。どちらにしても災厄を乗り越えた兵団です。悲惨を生き延びた兵団です。少なくとも、平和を甘受し続けた兵団ではない。それに、彼らは故郷を取り戻したい」

うんと頷き、もう一回頷く。

「適任だろう。ギルドに計ろう」

「通訳しましょうか？」

「いや、ギルドに数人、ザブンテとの取引があった者がある。これはギルドで受けるべき問題だ。ギルドの問題であれば、ギルドで解決するのが筋だ。紹介はしてくれるな？ だが、この先はギルドの問題だ。私がでしゃばるべきではない。彼らに任せる」

ぽかんとするのは充分だった。

わたしは茶をすすることすら忘れた。

(この人は一流なんかじゃない)

ごくっとのどを鳴らす。

(超一流だ)

思い出したように茶をすする。

「ひきこもらない方法もあります。ですが、それはかなり未知数です」

リドリーの真剣な視線が、わたしを刺す。それを受け止め、見返す。

「効率化です」

「具体的には？」

眉根を潜めるリドリーの口元は笑っていた。

眉根を潜めるリドリーの口元は笑っていた。

「分かりません。しかしボルニアは、キュディスやトランと一戦を交えることを避けてきました。それで南進を決意した。つまり、ボルニアには勝てない相手があるのです。それがキュディスであり、トランなのです」

「なるほど。効率化の話を聞こう」

息をする。

「キュディスの兵は、虹翼の3500騎。数の上ではボルニアに足りていません。しかし、おそらく両軍がぶつかれば、ボルニアは虹翼を一騎も落とせないでしょう。それは空にはボルニアの牙は届かないからです。極めて効率的です。一騎も失うことなく、6000騎を殲滅できるのであれば」

「恐ろしいな」

「それをシドも獲得しないと、守れない」

リドリーは、しびしびながら頷く。

「増兵よりも、戦い方の変化が重要と？」

「必要と。現在もっとも最先端の戦法は、鉄鎖繰竜法です。ボルニアはまったく経験のない騎竜兵をいくらでも作れる方法を持っています。これは大きい。ボルニアの強みは鉄鎖繰竜法なのです。シドは、倒しても倒しても現れる敵と戦う危険にさらされています。無限に生まれてくる敵兵、これほど怖いものはありません」

「なるほど。ではどう対処するのだろうか？」

わたしはためいきをつく。

「対処できません」

「私は、そう思わない。シドが強いと言ったのは卿だ」

「そう」

しかし、応用熱力学を学ぶものばかりが溢れるシドを想像して、暗澹たる心地に浸る。何らかの方法があるはずだとは思ふ。しかし、それが何なのかわからない。

「古文書を当たってみよう。なにかあるかも知れない」

それは最低な答えだった。

しかし、それが正しかった事が分かった。シドを守ったのはまさにそれだった。この時点で、それに気付くのは不可能に近かった。まさか、それほどまでの戦術上の転換が可能な戦い方が存在しているとは思っていなかったのだ。

「シドは滅べと？ 古くさい書物に埋もれて？」

考える。

そして、その懐疑的な視線を向ける裁判官殿を、見つめた。

「あなたがいるから、大丈夫です、裁判官殿。正しい答えを見つければ、それが正しいと気づける。あなたなら間違いを避けられる。見つかったらあなたに話すだけでいいのです。これで上手く行くかどうか、そして裁判官殿は答える。上手く行かないなら行かないと、上手く行くのであれば上手く行くと」

リドリーは黙った。しばらく長い沈黙だった。風が吹くのが分かった。この人の信頼を掴んだのだと、それは実感だった。この人は味方だと、いつでも助言をしてくれると、共に側にいる仲間だと。

「探す努力はしてもらおう」

「もちろん」

にっこりと笑ってみせた。

「ですが、相談には乗ってもらいますよ。せっかく見つけても、厄介払いではたまりません」

「いいだろう」

話はついたとばかりにリドリーは立ち上がる。それで慌てる。

「まだ、調書を取っていません。裁判の資料として、」

「卿の報告書は真実とすでに証明されている。これ以上の取り調べは必要ない。今日は、ザブンテ人の話が聞きたかったのだ」

戸惑うように、席に座る。

「報告書？」

「卿のような賢い者が気付いていなかったのか？」

まあ、それならばさらに真正性が証明されるので、問題はないのだが。そうリドリーは呟き、困ったようにためいきをつく。

「あの、卿の書いた報告書は青年により届けられた」

「はい」

「しかし、その信憑性を確認しなければならない。ここまでは分かるかね？ 大事だ。シドの根幹を揺るがしかねない報告書だった。だから、誰だって慎重になる」

（戦いたいかな？ 世界と？）

確かにそういう内容だったのだ。

頷く。汗がたれる。

「そのために、裏を取る必要があった。その報告書に記載された内容が真実であるか。当然にそれぐらいの手間をかけてもよい、そう思わないかね？」

「え、ええ。裁判官殿らしい……。」

リドリーは満足そうに頷く。

「なので、卿の報告書の記載が事実であるかどうか、取り調べていたのだ」

緊張すると、リドリーは口元を、やわらかく緩める。

「卿は、正直で賢明な人物であることが分かった。事実には1つの歪みもなかった。それは、報告書を読んだ誰もが認めた。なので、取り調べはもはや必要ないのだ」

「ほ、報告書を読んだ？」

リドリーはしらばっくれる。

「あれを読んだすべての者だ。昨日青年に返したが、だいぶ多くの者たちが読んでいる。だが、あれは駄目だ。危険すぎる。調書だって、裁判当日になくなっている事に全財産を賭けてもいいほどだ」

「しかし、」

リドリーは眉根をしかめる。

「もし無理に真実を明かそうとすれば、彼らに裁判を止める方法が1つしかなくなる。それはなんなのかぐらいわかると思うのだが」

ごくりとつばを飲む。

「いえ」

「殺すしかなくなる。卿をだ。そんな危険は侵せない。奴隷貿易はシド商人に莫大な利潤を与えている。それを奪うのは常軌を逸している。だから大公は案外正しいのかも知れない。過去は灰の下に。奴隷貿易が馬鹿らしくなるほどの利潤がでる産業を、卿やわたしがどう思うにすれ、大公はそれ以外の解決方法はないと思っている」

両脚が震え始める。

しぶしぶ頷く。

「わたしは負けますか、この裁判」

リドリーはあきれたような視線を投げた。

「負けなければ、死だ。負けても大丈夫なように必死になっている」

14.

勢力が破れ、その体制が覆るとき、その主勢力のほとんどは近衛兵だったと歴史書は言う。

権力に近く、その情勢を常に把握しており、なにをすれば自分たちに利するかが掴みやすい実行組織であるからであろう。けっして忠誠心に厚い兵団ではない。権力との馴れ合いが上手いにすぎない。

「今日は、ザバック子爵の入れ知恵だ。どうも、リノリ橋付近にザブンテ人たちが入り浸っているらしい」

ロイボルトが山賊の頭目よろしく語るのに、同じく山賊と化した近衛兵たちが、口々に言う。

「報酬はなんですか？」

「どのような方針ですか？」

「利益の最大化には、なにが必要でしょう」

ロイボルトは沸く近衛兵団を抑え、決めぜりふを言った。

「おれたちの任務は金じゃない。でも金だ。依頼主を儲からせたやつが一番儲かる。子爵殿は、不倫のデートのさなかをザブンテ人に見られるのが不満だ。確かに治安上よろしくない」

こんなので成り立っているのがシドの近衛兵団で、それは不謹慎でさえある。

よく、エストの近衛兵団と比較されるのであるが、王権が神聖視される国家とシドは根本的に違う。わるく言えばシドは利益至上主義の国、よく言えば商人たちの自発的な統治機構がその本質だと思う。主が商人である以上、近衛兵団も商人的なだけなのだ。

精兵ではある。

そうであることが利益を最大化し、自らに利すると分かっているからだ。

鍛えれば金になる。精兵であることで商売になると思っている。

なぜロイボルトがこのような兵団を掌握しているのかというのは長いこと謎ではあった。

それは、裁判事で若い近衛兵が血相を変えて駆けこんだときに分かった。

「兵団長、不倫がばれました」

「それはまずいな。出来た子供に未練はあるか？」

「まさか」

冷や汗を垂らす若い近衛兵を見つめながら、ロイボルトは言う。

「それは、おれの子だ。不倫をしていたのはおれだ。それでいいか？」

「す、すみません」

ロイボルトは書面をさらさらと書き、部下を罷免し、自ら罪を背負う。

この男はどうも、近衛兵団のひとりひとりが起こした事をすべて自分が起こしたこととしたいようで、それは膨大な傲慢ではあるのだが、この男には善悪の価値観がなかった。

なにかをしたのは自分でありたい。

それが善であろうが、悪であろうが。

そのために、部下の所行は全部自分の所行にしたがった。たとえそれが有力貴族のご婦人を孕ませたという事でも。

それで、ロイボルトの悪行の噂は絶えなかった。

酔って、飲み屋で大乱闘をしたことでも。

ジドを創建した女王の像に小便を引っかけたことでも。

真夜中に大声でボルニアを賛美する歌を歌ったことでも。

有力な貴族に殴りかかったことでも（なぜこれをロイボルトの仕業に出来るのかは、謎なのだが）。

すべては、ロイボルトがやったことだった。

なにもかもの責任どころか、その悪行のすべてはロイボルトのしわざになった。それはロイボルトの性格を知れば知るほどずれているのではあるが、近衛兵たちはすべての責任を負ってくれるロイボルトを慕った。一切の悪事を自分がしたこととする兵団長を崇拜した。

そして、近衛兵団は、この素晴らしい兵団長が罷免されないよう一切の悪行を慎んだ。

「それで、リニーはマードックを追わないのか？」

ロイボルトの見事な統率を堪能しているさなか、わたしは現実に戻される。

近衛兵団の、基地の一室。

命令が集まってくる、作戦室とでも呼べばいいのか、簡素な作りの広大な部屋にただ二人。わたしは、マードックの情報を、近衛兵団の情報網に託し、のんびりと静観を決め込むつもりだった。

「情報がない」

「つまらなそうな顔だな。もっと、面白くしたければどうする？」

わたしは不機嫌に鼻を鳴らす。

「近衛兵団と組んで、マードックに引導を渡すさ」

ロイボルトはゆっくりと笑った。

「それだ」

ロイボルトの立てた作戦は巧妙かつシンプルだった。

死神のガスコイン卿が仇敵マードック卿に復讐を企んでいるとの情報を近衛兵団は掴んだ。近衛兵団はガスコイン卿が凶行に及ぶ前に捉えたい。ガスコイン卿は必ずマードック卿が現れる場所に現れるはずだ。まずはマードック卿の安全を確保したい。一番危なそうなのはどのときだ？

あとはその場所にわたしが現れ、復讐を果たした後に、近衛兵団がわたしを取り押さえる。

「毎日こんな事をしているのか？」

あきれて聞いた。

それは悪知恵というには大がかりで、芝居がかった。

「いつもじゃない。だが必要になるときもあるな。主に事情がややこしいときだ。これはそうだ。近衛兵団が奴隷商人の有力者を害したとなれば、ラスペは蜂の巣をつついたようになる。だが安心しろ。おれたちはそのために訓練を積んでいる」

どんな訓練だと言いたくなつたのをぐっと堪え、それでもこのロイボルトが大公を害することだけではない事は分かった。それに、大公の性格からしてもこの近衛兵団を自らを利するように使っているようにも思えないし、大公の視野はもうすこし広く、時代の流れを操る方を好んでいる。

河の流れを変えられるのであれば、その中の魚をつついたりはしない。

過去を糾弾するよりも、勃興する火山の噴煙でそれを埋め尽くしてしまう人だ。

きっと大公は魚たちのほんとうの声をロイボルトに集めさせ、魚たちの声を聞き、どのように河の流れを変えようかと思っているのだろう。

(そのために近衛兵団のやんちゃっぷりには、大目に見るのか)

すべての魚たちの本心が欲しいのだとすれば、それはいかにも大公らしい。

できる限り、魚たちが望む方向に流れを変えたい。

「わるくない」

思い出したように呟くと、ロイボルトは口元を上げる。

「では早速準備に取りかかるとしよう。速い方がいい。そうそう、その前に美人の死神殿に一声いただけると、兵団も盛り上がるんだがな？」

わたしは冷静にロイボルトの瞳を見つめた。

「わたしは、近衛兵団とロイボルトを信頼している」

ロイボルトはぼかんとしたが、かっとなって言う。

「わかってんのか！ おれはおまえ破滅させる事が出来る作戦を立ててるんだぞ！ なにかミスがあれば、近衛兵団はおまえに罪を被せなければならない。破滅するんだぞ、もうしているとも言うが、それでもより一層ひどくなる！」

分かっていると呟くと、ロイボルトは黙りこむ。

報告に現れた近衛兵が、書面を読もうとして黙った。

「でも、一緒に世界を変えたいだろう？ わたしだけじゃない。近衛兵も、ロイボルトも、大公も、それにザブンテ人、ザブンテ騎竜兵団。まだまだたくさんいる。今のシドに飽き飽きした連中が同じ方向へ進めば、たぶん、ばかでっかい事が出来る。進む方向は大公が決めてくれる」

ごくりとロイボルトがのどを鳴らした。

「それをふいにするか？ できないと信じている」

ロイボルトはとうとつに大きく笑う。

長々と、長々と、それはあまりにもおかしくてたぶん一生分ロイボルトは笑った。天にも届きそうぐらい、大きな声で笑った。近衛兵はへなへなと座り込み、わたしは案外この者たちはよい者たちかも知れないと思った。

「泣いているのか？」

わたしが聞くとロイボルトは珍しく嘘を言った。

「まさか」

15.

キュディスでわたしは孤独に震えていたのかもしれない。

なにもかもに裏切られ、みじめな敗北をし、なきに等しかった全ての物を失った。

信じるべきものを奪われた。

蛮族どもは盟約を踏みにじり、まっぴたつに割れたバルケ族は嘘と欺瞞を撒き散らし、アドレルはシドの闇を映し、精鋭たる導き手の少年たちは互いを罵倒し、なぜかバルケ族は混戦を制したがそれさえも陰謀の一部であって、宿敵は正体を現して罾の底にわたしを叩き落とし、明らかにわたしに恋していたはずの少年はキュディスの秩序の為に死を選び、アドレルの上層部は虹翼騎竜兵団に滅ぼされ、戦いは終結した。

かの地にあった本当は寒さだけ。

吹雪く粉雪だけがわたしを守る友だった。

(小娘を凍てつかせるには充分か)

かといって南国シドの暑苦しい空気に甘えたいわけではない。しかしなぜか帰還したわたしの周囲には得がたい仲間にあふれ、その誰もが自由だった。

嬉々とする護衛の少年をみる。

「はじめてのはずだ、セントラルは」

トラス状になって天高く伸びる巨大な塔に果てはなく、そのわずかな下層にシドの中枢をはらむ。10層ほどまで活用されている区域はさながら空中庭園で、議会、軍の本部、数々の神殿、競技場などを収めて、まだ無限の余裕があった。

少年は嬉しそうな輝く瞳をかえす。

ロイボルトの作戦を忠実に実行した近衛兵団は、ついにマードックの居場所をつきとめ、老練な近衛兵の言によれば、セントラル上層の劇場で公演される悲惨な劇を楽しみにしているという。これから始まるのは喜劇というよりも茶番に近いのだが、空前の大茶番だけあってか、近衛兵たちの士気は高い。

——こういうのは誰だって燃えるんだ。

得意げに言い放つロイボルトをみていると、ラスペの街路は熱心に茶番を演じる人々に満ちているようにさえ思え、それは茶番ではなく現実なのだ和理解すると、あのキュディスでの孤独だけが「本当」だったのかもしれないと皮肉も言いたくなる。

——リニー、きみは目を見開いて生まれてきたのだ。

大叔父の葬式に訪れた大公は、大叔父はなぜわたしを選んだのかと泣きじゃくって聞くわたしにぽつりといった。その背中は何やかさびしげで、世界のあらゆる孤独を背負っているようにさえ見えた。わたしはそれを盟友を失ったかなしみだとおさなごころに思ったものだった。

今となってはそれは違い、大公も大叔父も、目を見開いて「本当」を見つめているのだとわかり、それゆえに震えるような孤独を感じているのだろうと思う。

それは本当の寒さ。

猛吹雪の粉雪が、友に思える寒さ。

それが永久に続くのを想像するのは、とても怖い。

もしキュディアスの惨劇がわたしの居場所で、ラスペの茶番がそうでなかったら？

しかし、周りにあふれた仲間たちも同じようなものを見ている気がし、なぜかおなじ言葉が通じる同郷人のような感覚になる。ふと気付く。少年をみる。

「さびしくなったりしないか？　ここはシドで、キュディアス人はただのひとりもいない、きみは一人だ」

「リニーがいる。それにシド語も話せる」

無邪気に笑う少年をみていると孤独という幻想が溶けていくようで、その暖かさに、この少年も仲間だったと思い返す。少年は壮大なセントラルを見上げ、ほれぼれと太陽に手をかざした。

「リニー、飛んでいいか？　近くでみたい」

横に首を振ると、表情がかけるにあわてる。

「中を見よう、そっちを先にしよう」

それで機嫌を戻す。

ラスペの中心地と言えるセントラルは直径1 kmほど。身分のない平民が入れるのは第三層までで、その上は軍と貴族の区画になり、お目当ての悲惨な劇と大茶番の舞台は第八層より上になるので、身分のない少年を通すにはどちらにしても飛ぶことになる。

そうしなければ通れないのであれば、用心深いともいえるのであるが、わたしにはそれがセントラルがたったの十層までしか利用されていない理由だと思っていた。

セントラルは古の建造物だけに、利用するには修繕が必要になる。

トラス状の第一構造体、空中の大地となる第二構造体、そして建物自体の第三構造体と、セントラルは三構造よりなる。

強固な第一構造体は無傷であるが、第二構造体は所々で壊れていて、第三構造体にいたっては風化していて跡形もない。

セントラルの頂上を誰も見たことがないのはそのせいで、もしその高みに立ちたいのであれば、想像を絶する修繕が必要になる。

夕刻を向えたフォルムには仕事を終えた者たちが卓を囲み杯を交わす姿が、暗み始めた街路の灯火の中に浮かび上がる。それはまるで宿営する兵たちのよう。

セントラルの底では、上層がじゃまをして星空は見えないのではあるが、涼やかな河面を渡る風は通り抜け、にぎやかな談笑を耳に運ぶ。30メートルを越える高さにある上層から受ける圧迫感はないに等しく、それが、セントラルに抱かれるラスペを誰しもが、クローナに聳え立つ空中庭園と共にある都市と呼ぶ所以だった。

「いそぐぞ、劇場はだいぶ上だ」

セントラルの中央を貫く、シャフトと呼ばれる用途不明な、直径100メートルはある柱の周囲には、シャフトに沿うように続く螺旋階段が8筋連なり、そのうちの一筋に向って早足になる。

その広い階段は2層上の役所群から降りてくる役人たちが底で酒でも飲もうと雑談に華を咲

かす。

一見しても近衛兵の姿は見当たらない。

それは当然で、近衛兵たちは軍の慣習上こちらを通らない、はず。

騎竜兵や、重たい物資を、この階段を通すのは、できないものではないが、利口ではないからだ。任務上、そういった機会の多い軍経験者はセントラル外周を、これまた8筋通っている幅広の斜路を使う。首竜の巨軀でもすれ違えるほどの幅がある斜路だが、軍部は律儀にも上りの斜路と下りの斜路を規定し、それを厳格に守っている。

ふと、少年がついてきていない事に気付く。

振り返ると少年は階段の端のてすりのほうまで行き、西日が差し込むセントラルの底の方を向いて、ちいさな背中を見せていた。夕焼けに染まるフォルムを一望する光景はたしかに絶景といえた。

(みるなとは、さすがに、いえないか)

もうそんなにあがってきたか、その背中に近づいて、きく。

「空から行かなくて、よかったですか？」

無言でこくりと頷く。

わたしはため息をついて、軽口を言った。

「満足し尽くしたら言ってくれ。それまで剣を研いでる」

「リニー、みた。明日の分まではみない」

くすりと笑ってしまう。

「明日は、わたしはつきあわないぞ」

「それでいい」

早足で先に階段を上っていく。

(あれはきっと早く第2層の「今日の分」をみたいのだな)

苦笑さえしたくなるのだが、ついていくしかない。

第2層には騎竜兵同士が戦う見世物をみせる闘技場、そして、速さを競う競争用のコースがある。趣向を凝らしたそれらの中に入れば見物はあるが、開催時期をとうにすぎた、この時間は閑散とし、あるのは巨大な施設と、下層民相手の見世物小屋ぐらい。フェスタとなれば、数え切れないほどの出店とが埋め尽くし、第2層の街路すべてを使い切ったの、障害騎竜レースが繰り広げられる。熱狂した市民たちではちきれんばかりになるが、いまはさながら冬の避暑地。

巨大ながらんどうが聳え立つだけ。

少年がさもつまらなそうに通り過ぎ、わたしは追いついて、

「賑やかになる、そのときにこよう」

それでやっと納得する。

ちいさな端正な顔が、わびるように微笑む。

「リニーのために来た。それを忘れる」

「お互いのためだ。お互いしたいことをしていい」

それが仲間だといいそびれて、少年はうなずいて先に、階段を上り始めてしまう。

わたしは麻痺した患者のようで、ようやくと事態がわかりはじめた。

世界が変わろうとしていた。

それはわたしを取り巻く世界であって、事実上のシドではないのだけれども、それでもわたしのかわるすべてであるのだから、わたしにとっての全世界、それがいつの間にか変わっていた。

キュディスでの孤独、しかし今は、ひとりでない。

粉雪を友と思う必要はない。

震えが来て、思いとどまる。

(ロイボルトみたいだと、ロイボルトに笑われる)

少年は無言で駆け上がってしまう。追いかけないと、つかめそうにない気さえした。必死になって、そのわたしをつかもうと手を伸ばした。その少年がわたしのすべてに思えた。事実として、全てだった。わたしは一人であることに慣れすぎていた。キュディスは凍えるほど寒かった。

第三層には大理石だの、御影石だのをふんだんに使った厳つい建物が整然と並ぶ。三々五々に歩く者たちを螺旋を描く階段から眺める。

みな書類仕事に従事するのに適した立派な身なりで、みな革の鞆を手に提げ、みな革の靴をはき、みな立派な帽子をかぶる。階下から上ってきた旅装姿のわたしと少年には場違いなような気さえし、たいそう居心地が悪く、それは少年も同様のようで、ふしぎそうにしきりに首をかしげる。

「リニー、なんでここには墓ばかり建っている？」

こらえきれなくなって、くっくと笑う。

ラスペの中樞ともいえる公官庁街を見下ろし、つい軽口になる。

「ここにはシドの現在と過去が紙になって積み上がっている。誰が生まれた、誰が死んだ。今どこに住んでいる、昔どこに住んでいた。今年払うべき税金はいくらだ、去年はいくらだった。あの土地は誰のだ、誰のだった。現在と過去だけだ。来年誰が生まれるかは、ここにはない。だから墓に見える」

少年はわかったのかわからないのか、ふーんと鼻を鳴らし、興味さえ持てないのか、石を積み上げて造った建物からそっぽを向いた。

思いついたように言う。

「リニー、そんなことしたら大変だ。そんなに字を書けないし、全部読むなんて誰にも出来ない。読み切れないのに、なんでそんなに書くんだ？」

「読みきれないわけじゃない。読むのはたいてい自分に関係するところだけだ」

この少年は案外賢いのかも知れないと思ってしまう。それは少年の剣の腕を知りすぎるほど知っているから思ってしまうのだが、なにも、賢い者に剣の腕がない必要はないし、その両方を持つてはいけない理由はない。

「ここにいる者たちは、みな字を書くのが得意なのだ。ここで働く者たちは普通よりたくさんの金をもらえる。だからわたしには退屈すぎて我慢ならないが、それでもここで働きたい者がシドにはたくさんいる。しかし、その資格を得るのは簡単じゃない。だからシドではたくさんの者たちが子供の頃から真剣に勉強する。キュディスでは翼竜乗りになるために訓練するだろう？ それはひとえに虹翼の兵団に誰もが入りたがるからだ、そうだろう？」

少年は不機嫌に眉をきれいにしかめる。

「父にやれといわれるんだ。それにあそこには他にすることがない」

ぷっと笑ってしまう。

「なにが、おかしい？ リニー」

「すまない。ラスペの少年たちが同じことを言うのをよく聞くんだ」

それでも少年はむっとふくれるが、導き手である翼竜乗りの少年が、その地位を誇りに思っていないというのは意外だった。

ひょっとしたら少年にとってアドレルは、荒涼とした雪原に幻のように浮かぶ夢の国であり、その親玉たるラスペが約束の地であるように見えるかもしれない。そうであればアドレルの商人たちからシド語を習おうとしたのも頷けることだし、シド行きを望んだのも、その父の束縛から逃れ、自由の地へと赴きたかっただけなのかもしれない。

「こんなにたくさんのものであるのか？ シド人は何が不満なんだ？」

「たくさんはあるが、それはすべて空っぽなんだ。だからキュディスのほうがたくさんのものであるように見える、すくなくともわたしには」

「そうか」

(しかし、今のわたしは空っぽなんかじゃない)

それはたぶんフランスのように、大局を見る大公のように、荷を運ぶリドリーのように。

たぶんロイボルトはわたしと同じで、その空っぽじゃない自分を取りに行く。

これから少年とマードックへの復讐を果たしに行くことが心弾む大冒険のように思えてきて、胸がすくような計画が頭をめぐり、わくわくと血が沸いた。

わたしは帰ってきた。

得がたいものに、抱えきれないほどの仲間にもまれて、ここに戻ってきた。

ふいに少年の足が止まり、その端正な表情に緊張が走る。

「どうした？」

「その先で兵が待ち構えている。そして強い」

そうこなくては。

16.

セントラルの第三層と第四層の間にある断層は、このシドの支配層が貴族と騎竜兵であり、いくら商才豊かな者であっても、大金でその地位を買わない限り、そのサロンの末席にさえ座れないことを意味した。

それが議会の椅子となればたいへんで、空席ができるたびに、増席が決まるたびに行われる競りには名だたる金持ちが参加し、驚くような額で落札される。

その狂気は味わうが華で、それでシドで最も高い税と言われる所以がわかるというようなもので、それがシドの税収の抜きん出た額を占めると、まことしやかに言われる。マードックが巨額の負債の変わりに、婚姻を要求したのも、そういった理由であり、あとは館の飾りにでもしておけば満足だったのだろう。

大叔父の議席は、義兄の家が継ぎ、父は莫大な財産を継いだが、残ったのは膨大な借金と膨大な蔵書だけだった。その蔵書は、わたしが受け継いだのだが、世界は不公平だと思わないように、いいものを取ったではないかと思おう。

大叔父は言った。

リニーはそれにふさわしいか。

それは、千の天才と戦えという、恐ろしいまでの挑戦を求めている。

遺産はそれだった。

それでも議席の承継権はたしかにわたしの血にあり、義兄がくればわたしの家に転がり込んでくることは確か。そんな不確かなものが欲しいのかと言われれば、必要がない。しかし、武装商船は危険だらけであるわけだし、海上でうっかり流れ矢に倒れるかもしれないし、それを仕込むのは容易。

しかし、義兄がそれほどまでの弛緩した油断に身をさらさすかと考えれば、絶対にないと保証できるほどで、いくらわたしが望んでも、あの男をくたばらせることなど、不可能に近いとさえ思うし、事実不可能だった。

断絶たる第四階層のエントランスには数十人にのぼる兵が詰め、第三階層から上がってくる者たちの身分証を確認する。それは、ラスペの日常であり、別段取り立てるようなことではないはずだ。しかし、その中には近衛兵の白銀色の鎧がみられ、由緒正しいシドの騎士団の末裔であることを誇示して、現在が“緊急警備警戒態勢”であることを示していた。

「身分証を。たとえ、名のある家のものでも、応じるのが義務です」

おきまりの言葉を言う。

「その前はなしでも通してくれたのだがな」

「そのときが特別だったとお考えください。それに」

衛兵は少年をちらりと見ていう。

「そのものは、ザブンテ人ではありませんね？」

「それがなにか？」

「いえ」

衛兵は気まずそうに口ごもるが、見渡すと、ザブンテ人らしき一団が衛兵に連れられて第四層への階段を上っていく。きっとよくある平民向けの特例措置と同じで、上層にある、神殿やら、劇場への入場を、日を限って許しているのだろう。一時的な開放は平民にセントラルを貴族たちの独占物にしているわけではないという、いいわけ的なガス抜き措置で、上層の”興行主”が衛兵へのボーナスを気前よく約束した場合にのみとられる。

少年がアイスブルーの瞳を衛兵に向けて誇らしげに言う。

「バルケ族だ、シド人」

「は、バルケ？」

「キュディアの一部族だ」

わたしが言うと衛兵は後ろに控える近衛兵のほうを見て、首を傾げる。

「なぜ、キュディア人が、ラスペに？」

「ああ！ 待て、貴様」

近衛兵はいきり立ち、衛兵を押しつけてわたしに迫った。

「死神のガスコインだな！ よくも、のこのこと！」

「リニーだ」

おじける衛兵を無視するように張り合うと、近衛兵は生意気なやつだとはき捨てる。

「貴様には、内乱罪の疑いがかかっている、同行願うぞ」

「証拠の提示を願おう。いくら近衛兵といえども、正式な手続きは踏んでもらう。問題を政治化させたいのか？」

「これだから貴族は口先ばかりで！」

その意見にはたいへんに賛成だったが、どうやっているのかこの近衛兵はほんとうにわたしを極悪人だと思っていた。目配せすると少年は懐から笛を取り出し、それを吹く。

「キュディアの翼竜乗りだ！ 虹翼を呼ぶぞ！ 取り押さえろ！」

わたしと少年は同時に数歩下がって剣を構える。

「抜くな！ 絶対に殺すな！」

わたしが叫ぶと、少年はすでに抜いてしまったグラディウス剣をあわてて鞘に戻す。

「はは！ 剣なしで何ができる！」

抜刀し、その大剣を見せびらかすようにする近衛兵を睨む。

(システィア流剣術には、無抜刀闘法があるのさ)

柄と鞘を握り、その鞘の先端で相手を威嚇する。

「ばかにするな！」

切りかかってきた大剣を鞘で滑らせ、態勢を乱れさず。それで脚を鞘で払うとよろめいた。軸足を払うと、どっと倒れる。

「面妖な技を！」

少年はこちらを見て、どうもその要領を掴んだよう。まるでためし切りのように、動きを真似し、衛兵の太刀筋を切っていく。心地よいリズムでステップを切り、システィア流をあっというまに理解してしまう。

わたしは一瞬目を合わせた。少年は微笑んだ。わたしはうれしくなって、その鞘を衛兵の腹に叩き込み、近衛兵の腿を打った。

システィア流は優雅に流れるようであるが、これは揺れる船上で軽装の相手を戦うことを前提とされているためだ。その要諦は波間のゆれと切りかかってくる相手の力を巧みに使って、その重心を崩させることに主眼に置いていて、転倒した相手の首筋に短刀を突きつけて、降参をもぎ取る。

いかにも交渉好き、つまり口先三寸のシスティア人らしい戦い方だが、実際にシスティア人は、この無抜刀闘法で戦っている最中に相手を丸め込む交渉をするという。

事実、わたしは師といえる人からその激戦下の交渉術まで習ったし、実践訓練は執拗なほど長かった。

システィアの冒険歌によれば、それによって東方の絹の国の皇女との戦いは数十分に及び、その時間が確保できたことで、その愛を獲得できた一流戦士の話が喧伝され、戦いの中の愛の囁きと、喧伝される。しかし、その男がなぜ絹の国の皇帝の地位を捨てて、わざわざその話を伝えるために帰国したのかが不明であるし、そもそもシスティア人は作り話が好きだ。

風きり音がかすかに聞こえ、少年の翼竜が、セントラルの第三層の建物の間を数百メートルもこのシャフトまで飛来しているのを知る。

わたしは近衛兵の大男と向き合う。

近衛兵は肩で息をし、わたしは息を乱していないのだが、それは端的に、システィア流が相手の力をたくみ使って相手を崩す剣術だからだ。挑発するように鞘の先を近衛兵に向ける。

「し、死神だ……」

近衛兵はわたしと、隣でシスティア流をマスターして衛兵数人相手に立ち回る少年を見てぼうぜんとする。それは大いな誤解であり、その男の無知であるのだが、わたしは無抜刀の構えを崩して正対し、すらりと剣を抜いた。

もちろん無抜刀闘法はシスティア流のほんの一部に過ぎない。

とたんシドの剣がまばゆい輝きを放ち、夕闇に沈むエントラス中を照らす。

近衛兵は目をむいて、つぶやく。

「し、シドの剣……、まさか現存するとは……」

「男！ わたしはリニー、この剣をバディスより引き継いだ、正統な後継者である。裁定者の義務を果たしに行く。シドは墮ちるわけには行かぬ。血が流れないことは約そう、今この場に流血がないのと同じように。男！ お前の落ち度とはならない、それも約そう。戦いをやめさせろ！ 妨害となるな！」

男はがっくりと膝を地面につき、弱々しい声で、戦いをやめるように言う。

少年は跳ねるように滑り込んだ翼竜の背に乗り、手を伸ばす。

「さあ、復讐だ」

その繊細なあごが頷き、わたしはその力強い手に引かれて持ち上がり、翼竜の背に乗る。とたん、激しい風圧とともに、公官庁街の間を滑空していた。

高度が上がると夜気がひえる。

冷気の中を翼竜はセントラルを大きく旋回しながら飛び、構造物に当たって上へと逃げる気流を探しながら、ゆったりと上昇していく。

夜営に備える灯火、夜間訓練に向かう隊列のたいまつ、そういったものを遠くに見ながらの飛行は、十分に幻想的な空中散歩のようにわたしには思え、ふと気づいて反対側に首をめぐらすと、宝石を無数に散りばめたような大地の星空に圧倒された。

夜景ならセントラルから何度もみたことがある。

神殿や、劇場が最上層に位置するのはそのためであるし、貴族たちにはなかば公務に近い祝祭への参列は夜間にまで及ぶことが多いからだ。

しかし、それはいわば窓越しの夜景にすぎず、夜気に髪をなびかされ、旋回する翼竜の背から見る光景とは別物に思えた。

世界が変わっていく。

「リニー、見るなどはいわない。教えてくれ。どこまで昇ればいい？ どこへ向かう？」

――セントラルが尽きるところまで、前人未到のの頂上へ。

そういい掛けて、言葉を呑む。

「最上層へ、建物が尽きるところがあるからすぐに分かる、そこへ」

少年はこくりと頷き、くるりと振り返る。

「なんで建物が尽きるのだ？ なぜそれ以上造らない？」

わたしはそれで言葉に詰まってしまい、数分間は、黙ってしまった。それでようやくと吐き出した言葉はこうだった。

「なぜそう思う？」

「リニー、あれだけ安全な土地があるなら、みんなあそこに住む」

「不便だ」

少年は眉根をしかめた。

「そのとおりだ、リニー」

にっこりと笑う少年に、わたしは顔向けする気さえしない。わたしの負けだった。わたしはぼつぼつと言う。

「セントラルは、支柱はしっかりしているが、その床を支える木材がぼろぼろになっていて、そこに建っていた建物はなくなっている。要は、支柱と呼ばれる構造体以外は全部だめになっている。だから、床から、建物から、すべて自前で建造しなければいけない。それには膨大な修復が必要だ。金と莫大な労力がかかる」

「造りたい」

キュディス語には部族を示す以外に、自分をあらわす主語はない。それでもその気持ちは痛いほど分かり、後に成し遂げる。そのときはただ飛んだだけ、セントラルを旋回する翼竜が上昇気流を見つけるたびに少しずつ揚がって、それを繰り返す以外は、空中を滑空していただけ。少年は夢を語り、わたしはそれを聞いた。それはぼうぜんとするような時間であって、未来の可能性を考える時間であり、ゆたかな時間だった。

旋回するラスペをみながら、将来を考えた。

想えば、貴重な時間だった。

のちに完全蒸気機関の発明と普及は、誰にも想像だにしない形で、シドをセントラル代開拓時代と呼ばれる時代に導いた。ボルニア戦役を主導した”野バラの諸侯”の中にあって、建設狂と知られる少年がキュディス人であったというのは、苛烈な時代を象徴しているようにも見えるが、その実は純粋な個人の熱意の発露に過ぎなかったことはこの頃より明らかであるように思える。

なぜ、少年だったのか。

そう問うのは愚問であり、みじめな偏見を含んだ問いである。

事実として、”野バラの諸侯”はシドの主流を乗っ取った非主流派であり、その軍事力の中核はザブンテの騎竜兵団であった。ボルニアの牙が迫るシドを統率した諸侯のほとんどはそれまでまったく知られていなかった人々であり、たとえば少年を知っていた者は皆無だったと指摘することはできる。

「リニー、建物が切れた」

「円形劇場だ。かがり火が炊かれているからすぐ分かる」

少年は高空から滑空させ、第10層と思われる地域に翼竜を侵入させる。祝祭に沸く層はお祭り騒ぎであり、大歓声と悲劇に満ちていた悲鳴に満たされていた。

「旋回」

少年はゆったりとした風情でその円形劇場の上空を旋回し、翼竜に意思を伝える。観客すれすれまでその滑空は降下し、風圧を持って観客を圧倒していく。次第に注目は劇よりも、旋回する翼竜に集まってくる。

くちぐちに叫ばれる声の中に、死神の語が聞こえる。まったくずいぶんなことだ。

ささいな復讐であることははじめから分かっていた。

ほんのすこしの抵抗。

それがどれほどの意味があるのかさえ分からないほどシドは膿んでいた。

少年に合図すると、演じている途中の悲劇の真ん中に降りると、暗黙に言っていた。わたしは飛び降りるなり、叫んだ。

「マードック！ 奴隷商人マードック！ お前の仕事は完結した！ わたしはお前との契約を果たした！ その奴隷が確保できるかどうかは保証しかねるが、仕事は終わった！ 契約完了だ！

それで返すものがある！ マードック！ いることは分かってる！」

わたしはじゃらりと奴隷船の鍵束を聴衆にさらけ出す。

それで劇場が息を呑んだ。

ひとりの若い男が席を立つ。

「おんな！ この神聖な演劇を邪魔してまで、そのようなことを、意味がどこにある？」

「リニーだ」

男は鼻白む。

「死神のガスコイン卿だ」

それで円形劇場はざわめく。

「返しに来た。この鍵束はわたしには不要だ。これはお前たちのものだ。だから返す。わたしにはまったくふさわしくない」

投げると男はあわてたように受け取る。

「船は返す。あれは要らない。そもそもわたしのものではない」

男はにたりと笑う。

「あれほどの奴隷船を返すとは、さすがガスコイン卿。莫大な借金を負ってどうするつもりやら」

それは唐突だった。

「やめろ！ それ以上しゃべるな！ 話したら首だ！」

どこかから老人の声が聞こえる。それを無視するようにわたしは着実に復讐を果たす。

「なるほど、おまえたちは商売に鎖を必要とする、じゃらじゃらと鳴る鎖を用いて、繋がれた者を動けぬように鍵をする。そのための鍵であり、そのための船。それがおまえらには必要なものなのだ？ 今そういった。それだけ価値があって得がたいものだ、あの奴隷船は、価値があると、あんなものが？」

静まる劇場に、一人立った男は苦し紛れに吐いた。

「年に1000万グロアの儲けを稼ぐ」

「それはたいそう」

「20年でガスコイン卿の追った莫大な借金を返せる儲けだぞ！」

わたしはそれで勝ったと思えた。

「それを返しに来て、事実として返した。文句はあるまい、わたしはいらぬのだ」

立ち去ろうとすると、馬鹿な男は案の定、言葉を返した。

「なぜ返す？ 死神、いや、ガスコイン」

「それは縛られるものの可能性を奪うものだからだ」

しんとした劇場に声だけが響く。唐突に低い老人の声が響く。

「おまえはキュディス人を連れている。鎖でないとすれば、どうやってキュディス人を丸め込んだ？ うわさでは寝取ったことになっている」

呼応するように、嘲笑が劇場に響く。

少年をちらりと見ると、自信満々で、つたないシド語で大きく話す。

「リニーは、シド人、リニーは連れてきてくれた、ここにだ。このすばらしい場所にだ。この楽しいところにだ。リニーといれば楽しい。シド人。このセントラルは、もっと上がある。もっとたくさん作れば、安全な場所がたくさん作れる。それが今日分かった。だから作ろう。こんなに

人がいれば作るのは簡単だ」

嬉々として話す少年に、劇場は啞然とするが、少年が照れるように頭をかく間に徐々にその構想が伝播していく。ザブンテ語での囁きが、しだいに無視できない量になり、セントラルの上層を開発する権利はどうすれば得られるのだろうかという難しい問題に発展しだしている。

もはやマードックと話すのも馬鹿らしいのであるが、シド語で話す。

「おまえたちは、シド語を話さないザブンテ人であっても、鎖を必要とするのか。ザブンテの民にも、鍵をかけるのか。奴隷としてその自由を奪うのか。そうしないと儲けられないのか。安心ができないのか。可能性を奪うのか。それは違う」

ザブンテ人のささやきが止まり、シド語の声が途絶えた。

「わたしはこんなものはいらないんだ。いらないから返すんだ。鎖がなくても、わたしは多くの仲間と繋がっていて、その仲間とやりたいことが山のようにある。世界のどこにいても、音信がなくても繋がっている仲間が、そばにいと奮い立ってくる人たちが、わたしには溢れるぐらいにいる。その仲間は鎖で繋がってはいない。よく分からない、見えない、そして、切れないつながりで繋がっている。ザブンテの民よ！」

わたしは大声で言った。

「わたしが間違いだったら言って欲しい！ 今日、ザブンテの民とたったひとりのキュディアスの少年の間にたしかな絆ができたはずだ。そうではないか！」

ささやきは、ざわめきになり、ラ！ というザブンテ語の「そうだ」を意味する声が満ち始めた。少年にその意味を教えると、少年は頬を上気させ、こぶしを振り上げた。

「作ろう！ シドを作ろう！ シドを守るために！」

世界が変わっていく。

「セントラルの第十一層より上の開発権の取得方法？」

正装をしたリドリーは傍らでぽかんと口を開ける書記を前に首をかしげ、卿は妙なときに妙なことを聞くなと呟いた。

「必要なかね？」

「ええ、明日にでも」

多くの見物客でごった返す大法廷。

リドリーはその法廷を仕切る人間であり、わたしは裁かれる人間だった。それであるから双方に監視がつくのであるが、逆にいえば監視が許容できる範囲であれば、理論上は話が直接できるはずだし、今のところ止められていない。

わたしがあの夜の話を話すとリドリーは言う。

「なるほど、ザブンテ人は住処が欲しいだろう、しかし、金は誰が出す？」

「出したい者はたっぷりいます」

リドリーは眉根をひそめる。

「たっぷり？ 膨大な額だぞ」

「今、ラスペの屋敷に掛けられている値札の額をご存知ですか？ わたしの小さな屋敷でさえ一千万グロアでは買えないと、老貴族に言われたことがあります」

目をぱちくりし、リドリーは聞いた。

「買い手は誰だ？」

「機械狂い。実験する場所、機械を作る場所、大きな騒音をたてる場所、危険な毒ガスを充満させる場所。かれらは喉から手が出るほどをそれを欲しているのです」

リドリーは楽しそうに苦笑をするが、苦々しく呟く。

「それはラスペの屋敷を占領させるよりも、セントラルに隔離したほうが良さそうだ」

「それが可能ならば彼らも望むでしょう。それに彼らは機械を作る人間を欲しています。いくらよい機械ができて、一人で作れる機械の数は限られている」

「雇うというのかね、召使のように」

わたしは力強く頷いた。

何夜も、何夜も、この考えに間違いがないか確認した。そしてその結果得られた結論は途方もないものだった。

「ええ、そして彼らは機械を学びます。いずれ同じように大金持ちになりたいと、勉強しそこの仕事を熱心に覚えます。その者が独立して師の考えにはない新しい機械を作るとしましょう。そうすればまたそこに学びたいものが訪れます、集まってきます」

「全体としてどんどん大きくなる」

「つまりセントラルは上方へ無限に広がっていく」

その自律的に成長していくセントラルという姿を少年に話したらどう思うだろうと思い、早く彼の輝く目が見たくて仕方なくなった。リドリーは頷く。

「なるほどわかった。調べておこう。ザブンテ人の職として適切だ、卿は」

リドリーは言いかけて黙ってしまった。

なんだろうと思い小首を傾げたが、リドリーは続けて言う。

「まだ言いたいことがあるそうだな」

「ええ、ザブンテ人だけではありません。世界中から集まってきます。あらゆる人々が。このラスペで学び、覚え、大金持ちになりたいと、世界中の青年が、少年が、海を渡り、ジャングルを越え、河を下り、帝国から、キュディスから、トランから、ザブンテから、そしてボルニアから。セントラルはいくら建て増しても追いつかない状況になるでしょう。それがもう始まろうとしているんです、明日にも」

リドリーは静かにそれを聴いていたが、ふっと苦笑する。

「なにか？」

「いや、失礼。君は議長閣下の愛弟子だとばかり思っていたが、どうやらそれだけではないようだ」

「はい？」

大叔父のことを言う。

リドリーは困ったように視線をそらす。

「君の話す姿は、その情熱的な瞳は、危険なほどに魅力的だ。まるで大公閣下の愛弟子ナンバーワンは卿だというように」

「まさか」

リドリーはさっと手を出し、わたしに握手を求めた。

「その話、乗ろう。わたしも一儲けがしたくなった」

わたしが手を握った相手は、わたしに罪を押し付けるはずの役目の人だった。でもそんな話とはとてもなくちっぽけな話で、どうでもよいささいなことのように思えた。

事実、このセントラルの第十一層以上の開発権の取得という難題を解決することは、おそらく歴史上、このリドリーという超一流の人間以外には不可能だった。

法廷に裁判官たちが入ってきても、激しい野次は収まらなかった。

厳粛な表情を浮かべる黒衣の中には大公の姿もあり、他の居並ぶ老人たちに面識がある者はなかったが、威厳に満ち溢れた姿は見るだけで高位の者なのであろうと想像するのは簡単だった。

震えが来て、事の大きさが身体中に染み渡る。

遅れて、裁判長であるリドリーが怖い顔をして現れ、ゆっくりと中央の席に座り、重厚な書記台に、分厚い革の法典をバンとたたきつけた。

「静かに」

それでも野次は止まらず、無言で持ち上げて、二度、三度とたたきつける。

「静かに！ ここは法廷だ！ 静かに！ 見物の発言は許されていない！ 衛兵を呼ぶぞ！」

何度か繰り返すうちに法廷は静まり始めたが、それでも大声を上げる数名を認め、リドリーは衛兵を呼び、法廷外へと追い出す。それでしんとした。法廷を見まわしていると、例の通訳の青年の姿が見え、視線が合う。気が気でないと狼狽し、明らかにわたしを心配していた。

「裁判をはじめ。訴えを述べよ」

通りのよい声で宣言すると、おそらくアドレルの老人たちの家族の代理と思われる立派な身なりの男が立ち上がる。

「訴えを述べる。その者は依頼主の船に乗りアドレルに向かった。その一年の後に、その船を乗っ取り、空の船でラスペに帰ってきた。しかも、キュディス人を数名連れてだ。ここは強調しておきたい、数名のキュディス人とともにだ。一方、定期的に行き来している我々の連絡船の報告では、アドレルは壊滅したと。いや、裁判長、正確ではない。アドレルの上流階級だけが滅ぼされた。なにが起こったのかはまったくわからない。しかし、分かっているのは、我々の家族が殺されたということだ。ここに証拠を」

男は証言を記載した書類を提示し、聴衆に掲げて見せてから、ゆっくり歩いてリドリーに渡す。頷いて受け取りリドリーは眼鏡をかけて視線を走らせる。それから他の裁判官たちにそれを渡す。

「確かに」

わたしの脳裏には、闇夜を埋め尽くした虹翼第三兵団、黄の兵団の500騎がアドレル上空を旋回し、今まさに制裁を発動させようとしている光景が浮かんだ。一糸乱れぬ編隊が合図を受けて城に殺到し、翼竜から飛び降りた精鋭たちが城にあるものを皆殺しにしていく。血が流れ、血が流れ、悲鳴さえ聞こえず、無言のうちに禍根が断たれる。

10分もかからなかったはずだ。

さむけに身体が震え始める。

城中の死者を埋葬した吐き気を覚える光景が浮かんでくる。

(もう、その話はしないでくれ！)

それでも意識を保とうと耐える。

「キュディス人が、アドレルの恩恵を手放すとは思えない。もし手放す気があったとしても、不意打ちをされる覚えはない。すくなくとも宣戦布告は届いていない。つまり原因はこの者しかなくなると考える。なぜ、この者は生き残り、ラスペに帰還した？ 大いなる疑問だ」

(城壁の上で交渉をしていたんだ！ 合図を握る少年に思いとどませようと！ だが、身を投げた。それが合図だった。爆発が起こった。そしておそろしいことが始まった)

やめろ、やめろ、やめろ！

あのと時の叫び声が、粉雪の吹雪の中に聞こえる。

絶叫は届かず、無力なわたしは寒さの中にひとりだった。

(アドレルの恩恵だって！？ 方々の国々を搾取しつつして、それが恩恵だと言うのか！ キュディスがなぜ虹翼の制裁を発動しないと？)

その訴えが法廷に染み渡るのをみて、リドリーは口を開く。

「耳を傾ける価値はあると思う。続けよ」

（あなたは、わたしの報告書を読んだはずだ！ 調書でそれを確認した！ なにが起こっていたかは手に取るようにわかっているはずじゃないか！）

理性では分かっていた。彼はこの法廷で最善解を誰にも納得できる形で導き出したいのだと。その落とし所も知っている。何度も聞かされた。わたしは基本的にリドリーを、親よりも信用しており、その手腕に疑いを持ったことはなかった。味方をしてくれることすら信じられないことであるし、彼との話は時間を忘れる。

それでも、感情的に受け入れられないのは事実であり、それは耐えるしかない。

ちらりとみると、通訳名目の青年は怒りに顔を高潮させ、がたがたと客観的に見ても病人に近いほど震えている。それでだいぶ落ち着く。

（わたしには仲間がいる・・・）

「我々はアドレルの財産を失っただけではなく、この者に家族を殺されたも同然なのです。2億グロアの賠償とともに、数多くの殺人の罪で、この者の死を求めます！」

男が叫ぶと、リドリーは鋭い視線を向けた。

「殺したも同然と、殺したは違う」

「ほとんど同じです！」

「いや、まったく違う」

リドリーの凜とした声が響く。

「卿の息子が軍に入り戦争となった。しかし、将があまりにも無能で、兵団は全滅した。そして、将だけが生き残った。将に息子は殺されたも同然だ。その将に殺人罪で死を与えるべきだろうか？」

「罪に対する罰は受けるべきです」

なるほどと頷く。

「では、卿の息子が船に乗り航海に出た。しかし、海図を見るはずの水兵がいねむりをしてしまい、船員のだれもがそれに気付かぬうちに、暗礁に乗り上げ船は沈没、水兵と船長だけが生き残った。船の乗組員は、水兵に殺されたも同然だ。水兵には死を与えるべきか？」

男は黙り込み、告げられている話の意味が分かり始めているようだった。

「いえ」

「では、誰の罪だろうか？」

苦しそうに言う。

「船長です・・・」

「では、船長が亡くなった場合には？」

法廷はしんとする。リドリーはわたしに聞く。

「卿のキュディスでの役職は？」

「使者です」

「それは水兵といってよいだろう。では、船長は？」

「しかし、受けた損害を誰かが賠償する必要があります！ 誰が損害を？ キュディスの兵団が損害を与えたとも言うのですか？ 虹翼と戦えと！？」

男は半狂乱になって、リドリーに抗う。

(そうだ。虹翼と戦うかどうかを問われている。搾取し続けたいならばそれしかない)

「水兵には上層部を皆殺しにすることは不可能であるとは言えよう」

男は金縛りにあったように凍りつく。

「しかし、過失により、その状況を招いたと追求することはできよう」

(あれが、過失であったと？ タイビにわたしが勝つことが必要だったと？)

虹翼騎竜兵団、第八の兵団。

キュディスの諜報を担う黒の兵団。世界の闇を操る兵団の尻尾を掴んだというのに。それでも、わたしに求められていたのは、それに勝つことだと？！

(無理だ！ そんなことは不可能だ！ 絶対に飛べない壁を超えろと！？ それはわたしの仕事なのか？)

リドリーは冷たい視線をわたしに投げた。

「卿は、訴状を受け取りながら、反論たる証拠を提出しなかった」

(嘘だ！ わたしは提出した！ あなたはそれをチェックする取調べまでしたじゃないか！ 何もかもがでたらめじゃないか！ それはわたしを守るためなのか、それとも、キュディスの第八兵団に勝てということなのか！ 小娘なんだぞ！ いくら大叔父の教えを受けたとしても、わたしは小娘なんだと、叫びたい)

「卿は、」

リドリーが告げようとするのに、見物から高らかな声が響いた。

「リドリー卿、わたしは確かにあなたに証拠を提出しました。それがなぜあなたはそれを伏せるのですか？ シドは真実を知るべきです。なにが起こっているのか、」

「衛兵。見物の発言は許していない、追い出せ」

高潮した通訳の青年が、衛兵にもまれるように追い出され、青年はリニーとだけ叫んだ。戦えリニー。それは、黒の兵団に対してだろうか？ シドの闇に対してだろうか？

リドリーを睨む。

(お前も戦う気があるんだろうな。そうでなければ許さない)

リドリーは頬を緩める。

「賠償するかね？ すさまじい額だ。わたしには返せる気がしない」

(同じ事を言えと、あのときに自分に誓ったことを言えと、それで丸く収まると、あのときに約束したことをここで宣言しろと？)

緊張する法廷ににらみを利かし、わたしは静かに言った。

「払う。全部払う」

「2億グロアだ。卿はそれを理解しているか？」

ごくりとつばを飲む。

「払う」

それで、法廷はざわめき始め、リドリーはバンと法典をたたきつけた。

「合意した。訴えは認められた。争いはなくなった」

裁判員の全員が立ち上がり、拍手をする。

(これは茶番だ)

わたしは耐え切れなくて、しばらく震えていたが、なにか巨大な役目が押し付けられたような
気もし、それで余計に震える。大公がわたしを見た。それで、視線を向ける。

「貴公は罪を背負った。シドに対する罪を背負った。国家に対する罪だ。始まりの女王より、伝
統的に、そういう者には忌み名を与えることが、シドの慣習である」

それであらゆることが分かるようであり、なぜそう呼ばれたのかが分かるし、与えられるのが
、なんであるかが、分かった。

「貴公が入ってアドレルは滅びた。そうであるならば、そう呼ぶしかない」

わたしは、もうそれを受け入れているのだろう。

「死神のガスコイン卿。公文書にそう記載する事を義務とする」

大公は笑った。

「死神リニー。君の名だ」

キュディスから戻ったわたしが起こした騒動はそれで終わったはずで、ずいぶん物騒な帰還だったように思う。

書記官に連れられ、判決文が出されるまでの間を待合室で過ごしながらか、一時間も、二時間もラスペで出会ったものたちが、その檜材の豪華な調度品に囲まれた部屋に浮遊するのをそのままにした。

「お待たせしました」

「ありがとう」

書記机に恭しく載せられた判決文を読み、頷き、サインをする。

書記官がそれを持って下がると、ほんとうに終わりだった。

ラスペ中がわたしのことなど忘れたかのように雑踏に戻り、わたしは少年を連れて裁判所を出て、涼風が抜けるセントラルをぶらりと歩く。夕食にはまだ早い時間だった。今夜もおそらくポテトスープ。ブロッコリーに、ハムぐらい入っているかもしれない。スープはきっとコンソメだ。

はなうたを歌い、海洋の向こう、キュディスを思い出す。

粉雪の吹雪く戦場。

ひょっとしてわたしの居場所はそこにしかないのかも知れないと、思い始める。

(そういえばロイボルトの姿は見なかったな)

興味津々と言った瞳を向けて少年がわたしを覗き込む。

「リニー、どうした？ 退屈なのか？」

「いったらう？ ラスペはからっぽなんだ。なにもないんだ」

(すべてが茶番、ほんとうなんてどこにもない)

瞳をくりくりとさせて、少年は言った。

「そんなことはない、リニー。リニーが見落としているだけなんだ」

「そんなものかな」

ふいに、街角に裁判所で対面していた男の姿を見つけて、書類を読みながらのんびりと茶を飲むその席まで歩く。

リドリーはわたしに気づいて柔らかく笑った。

「文句でも言いに来たのかね？ あれは高位にあるものの義務、公務なのだ」

「いえ、そうではなく」

その向かいに座り、ベルガモットを効かせたフレーバーティーを頼む。

「私的な商売の話を。あなたは運河建設で名を上げたと聞いています」

リドリーは楽しそうにそっちかと呟き、懐かしそうに頬を緩める。

「まず言うておく。運河建設のときのやり方はセントラル開拓ではつかえない。それでもいいかね？ それにあれはそんなに大した仕事ではないんだ」

さらりという。

「ええ」

リドリーはことなげに話し始めるが、次第に力が入りはじめる。

「クローナ河にタート口滝あり。ジャングルを流れるクローナには、唯一の断絶がある。たかだか高さ20メートルほどの滝で、シド蛮族の言葉で首竜の背という意味らしい。それぐらいの、滝としてはかわいいものなのだが、その滝一つでクローナ河は上流域と下流域に分かれる」

「河船では滝を航行できない？」

リドリーは頷く。

「遙か昔、クローナの河運は上流船と下流船を二隻用意して、滝で荷を積み替えていた。そうになると、滝で荷を積みなおすための人夫が必要になる。滝は奥深いジャングルの中にあり、肉食竜がよく水を飲みに来る。仕方なく船主たちは、上流域で荷を積んだ後、人夫を河船に乗せて滝まで来て、荷を下流船に積みなおしたのち、ラスペまで人夫たちと下った。意味が分かるかね？」

きつとぼかんとしていたのだろう。

「恐ろしいほどの無駄だ。そこで、滝に常駐させる、積み替え用の人夫を共同で雇おうという話がギルドで持ち上がった。その際にある男が言ったのだ。どうせならば運河を作ってしまう。そっちの方が手っ取り早い。有志を募って、運河建設資金を出資する事にした。その資金は運河の通行料で償還すると」

教授のようなリドリーの話は続く。

「それはまったくの失敗だった。資金は集まり、運河はできた。しかし、出資者、わたしも入っていたのだが、は運河が大成功を取めると、法外な通行料をとるようになった。考えても見たまえ。それまで商品価格に輸送費が占める割合は8割に達していた。それが突然に1/10になったのだ。その浮いた輸送費の1/4ぐらいは取ってもいい、1/2、3/4とエスカレートしていき、タート口運河は出資したものが暴利を貪る道具に成り果てた。公正ではないと必死に抵抗しても、通行料は出資者たちの多数決で決める。もはや運河開通前とほとんど変わらない輸送費になった。運河建設の目的から外れている」

「どうしたんですか？」

わたしは、すこしだけ身を乗り出す。

「ギルドに買い取らせたんだ。もちろん出資者らも抵抗する。それで、第二運河を建設すると脅し、出資金の2倍の額を払うことで決着した。そもそもこの事業はギルドでやるべき事業だった。ちょっと滝を迂回するだけだ。出資を集めなくても十分ギルドの資金で出来た事業だった。ギルドに入るには出資金は必要ないし、ギルドの合議で通行料は決めるとなれば、公正になる」

リドリーはふっと笑った。

「卿ぐらいの年だった、若気の至りだ」

それでフランツのような燃える青年の姿が見えた気がし、リドリーと重なる。この人はどれぐらいの間、孤独だったのだろうと果てしない年月に思いをはせる。

「ただし、セントラルにこのギルド方式は向かないな」

「向きませんか？」

「ああ、考えてみたまえ。運河を利用する人間は限られている。合意が容易だ。しかし、セントラルはどうだ？ 数万人の単位になる。とても会議など出来ない」

なるほどと頷くが、リドリーには何か腹案があるように思えてくる。

「何か案があるのですね？」

リドリーはおやとわたしのほうを見る。

「ああ、卿の裁判の最中、ずっと考えていたのだが、」

「ちょ、ちょっと待ってください。公務であり、義務だったのでは？」

「あんなの茶番だ。まじめにやるだけ馬鹿らしい。それよりも卿の提案の方がよっぽど面白みがある、そう思わないのかね？」

リドリーの言いようは、理解できないでもないのだが、このまじめくさった超一流の頭脳は、案外少年のようにやんちゃなところがあるのかもしれないと思いついて愕然とする。

「そうかもしれません」

「この話を持ち込んだのは卿だ。すこしは考えてみたらどうだ？」

リドリーはわたしを睨みつける。それから、付け加えるように言った。

「鍵を握るのはシドの貴族制だ。ここに盲点がある」

もうすでに答えを見つけているようなことをいう。

(貴族制？ それは何の関係があると？)

リドリーの主張はシンプルだった。独占的な権利を持つ出資者たちに統治を許せば、必ずその事業の目的をはずれ、独占的な出資者たちの利益を貪るための道具になる。それがリドリーの運河建設での失敗であり、その轍を踏んではならない。

どうやっても繋がらない。

教授は静かに語る。

「そもそもシドの貴族制は、帝国の皇帝陛下から拝領するものだった。今でも東岸諸国は形式的には帝国の属領、おそらく今でも皇帝から貴族位をもらっている、帝都にも近い。しかし、始まりの女王に率いられて東岸諸国を離れて後、本質的に変質する。シドの貴族位は女王から与えられるものになり、ラスペの建設、ジャングルだったシドの開拓に功があった者に与えられるようになった。知ってのとおり、ほぼ現在の国土が確定したとき王制は議会制へと変わり、貴族位を与える者がシドから消えた」

リドリーは鋭い視線をわたしに向ける。

「卿は領地以外に与えられているシド貴族の特権とはなんだと思うかね？ 領地だってそもそもその者の祖先が開拓したものを、貴族位とともに領地として追認するものだから、これも特権とは言いにくい。大公があればほどの領地を持つのは先祖が開拓したからだ」

「恩給が貰えます、一応」

「微々たる額だ。卿がもらえる恩給で屋敷が維持できるかね。シド貴族で商売をしないものはない。卿は貴族位とともになにを相続したかね？」

莫大な借金と、蔵書と、屋敷、たしかに特権といえるものではない。もう少しでその貴族位だってマードックに買われるところだった。

「貴族の役割とは何かね？ なぜ、シドには貴族がいる？ 商人とどう違う？」

「いえ、」

「高貴な義務を負わせるためだ。公務をさせる為だ。それを考えれば恩給だって安い」

わたしが戸惑っていると、リドリーが楽しそうに笑った。

「いや、ひとつだけあるのだ、あきらかな特権が」

「それは？」

「セントラルの上層へ入ることが許されている」

わたしが考えをまとめる間、宿題を片付ける間、リドリーは書類に目を通す。

(これがどう繋がるのだろうか？ セントラル開拓は開拓だから貴族位を与える？)

そんなことをしたら既得権益を持つものは反対する。

分からない。

リドリーの経験はたしかに貴重だった。

運河と似たような問題を取り扱ったことも、功績を認められればこそ、数多くあっただろう。一日の長、いや20年の長の経験を見せつけられる。

ふいに声が響いた。

「リドリー閣下ですね、探しましたよ、裁判長殿」

息を切らし、リドリーを睨みつける青年が目に入る。通訳の青年。

「ぼくはあなたに確かに渡したはずです！ 確たる証拠を！ それをなぜ、あんな仕打ちを！ ぼくはリニーにまったく顔向けできません！ 説明が欲しいのです！」

やれやれといった様子でリドリーはため息をつき、肩を竦める。

「公務とやらは、高貴な義務だな……、本人に説明してもらいたいところだ……」

青年の視線がわたしに向き、ぎょっと狼狽した。

「り、リニー、一体こんなところでなにを？」

「私的な商談だ。いま教授に難題を食らって、頭を悩ませている」

事なげに言うと、青年は怒りに肩を震わせる。

「リニーはあんなことになっていいのかよ、あれを説明できると？」

それは理不尽な事ではある。

「教授がわたしの命を救ったのは聞いていただろう？」

この男はわたしの命の恩人だった。リドリーはちらりと見るが、その視線はあんなのは戦場では日常茶飯事だと言っていた。

「それに、あの証拠を認めてしまうと、わたしが殺される恐れがあった。あの証拠は奴隷貿易を禁止しかねない。それは奴隷商人には耐えられない。たかだか2億グロアの賠償で命が助かったなら、安いものだ」

青年は納得いかないばかりに震える。

「ぼくは、この真実が闇に葬り去られるのが我慢ならないのです。シドの国民は知るべきです！ なにが起こっていたのか！ それで判断すればいい！ 今なにが起こっているかを知らされずに生きる市民は、国民は不幸です！」

困って眉根をしかめるが、青年は続ける。

「印刷所を買いました。もともとその予定だったんです。のんきに古典を、かびくさった物語を印刷して、売って、それで満足な利益を得る。それで充分だと、計画を立てたときは思っていたんです。でも、だめだ！ 古典は死骸です！ 過去の天才の排泄物です！ ぼくはそんなものは売りたくない！ あなたの物語が売りがたくて、刷りがたくて、仕方ない。いや、これじゃあだめだ。これは報告書です。これを読むのは裁判官ぐらい、だれもが夢中になるような、あなたの物語を印刷したいのです！」

狂気にも似た熱意を感じてリドリーを見るが、その視線は勝手にしたまえと告げる。

「それに何の意味が？」

「戦うんです！ 戦うんですよ、世界と！」

ぞくりと背筋をなにかが走り、瞬間に、得体の知れないなにかが震え始めた。

目の前の熱意にわたしは侵され始めた。正体不明の熱病のようにそれはたしかにわたしの意識を変えはじめ、その輝きが得がたいものに思え始めた。シドは真実を告げたとたんに壊れてしまう国だろうか？ そう、そんなもので壊れてしまうならば、壊してしまったほうがいいに違いない。

「名前を聞いてなかったな」

「クリフォード」

等身大の青年を見て、頬が緩む。

「クリフォード、わかった。協力しよう。しかし、先ほども言った。わたしの命がかかっている。これは物語ではあるが、架空の物語だ。名前は全部換え、荒唐無稽な部分も入れる。すくなくともこれが真実だとはわからない程度には。それでいいか？ それ以外の条件ではわたしは同意しない」

リドリーが呆れるのをちらりと見るが、クリフォードは蒸気が出そうなほど頬を上気させて頷く。

「今すぐ話を聞かせてください！ これでは足りない。ああ、キュディスの方も一緒にラスペに来たのですよね、その話も」

「いま重大な商談中だ。終わるまで待ってもらおう」

もちろんとクリフォードは頷き、席に座る。

「卿の解決を聞こう」

リドリーは書類に視線をやりながら、にやりと笑う。

なんとか考えをまとめようとする。

「そもそも、タート口運河の失敗は、出資者がその運河の権利を独占していることでした。ギルド全体が甘受すべき利益を、出資者に限ってしまった。本来利益を甘受すべき主体と、実際の利益を甘受する主体が大幅に違ってしまっていた。そこであなたは、本来の利益を受けるべき者に主体を変えた、それで解決した」

リドリーは視線を上げる。

「その通りだ。出だしはいい」

「出資者にも利益を与えないわけにはいけない。しかも特別の利益を。そうでなければ出資しない。セントラルを開拓するには、莫大なお金がかかるわけだし、出資者がもう分からなければ話にならない。法外にならない程度の利益を」

リドリーは頷く。

「与えなければならない、それは为什么呢？ 出資の見返りです。それなら超一等地の地代が適当、つまり、セントラル開拓の出資者に対しては、借地代で定期的な配当を与える形で報いる。この借地代の高騰を抑えるのが課題ですが……」

「どうするかね？」

言葉に詰まるが、やっと言った。

「公正な方法に委ねます」

「それは何かね？」

迫るようなリドリーの言葉にわたしは手を上げる。

「わたしはこの程度です」

うんと頷き、よくがんばったと呟く。

「卿が見逃しているのは、シドの貴族制だ。これは本来王制時のシドが与えていたものであるが、現在は世襲となっている。これを議会が与えてはいけない理由はない、貴族位をだ。昔は王が与えていて、王制は議会制に変わったのだ。議会には貴族の位を与える権限があると解して問題があるとは思えない。そして貴族位を与えられた者は、セントラルの上層には入れる」

リドリーは熱っぽく語る。

「セントラルの開拓者が、第十一層以上のセントラルに入れるのは当然だろう。しかし、現行のシドの規則では、それは貴族でなければならない。出資者はだれもが貴族位を持っているべきだろうか？ 逆だ。出資者には貴族位を与えるべきだ」

あまりにも難しくて頭をひねる。

「セントラル開拓に当たっては、その出資者すべてに、貴族位を売る。言い方が適当ではないな、出資者にはもれなく貴族位が与えられる。これは議会が与えるものであるから、当然に見返りが議会にもたらされる。それは卿が言った、借地代の名の定期的な配当の一部だろう。つまり出資したものの権利の一部が国家のものになる、当然に発言権もだ。貴族位の見返りだから、文句はあるまい。そうだな出資者の持分の1／3がいいだろう。拒否権を発動できる取り分だ。議会は借地代が不当に高騰しそうになったら、議決でそれに拒否権を発動できる、というわけだ」

おぼろげに全体像が見えてくるが、わたしは分からなくてうなる。

リドリーは笑う。

「シドの貴族位は、わずかな恩給を除けばコストが0なのだ。それどころか公務を押し付けられるし、配当も巻き上げられる。あの強欲な議会ならば飲むかもしれない」

「待ってください！」

視線を上げると、クリフォードが困惑していた。

「あ、あなたたちの話は、控えめに言ってもこのシドを乗っ取る算段に聞こえます……」

「人聞きの悪い」

不機嫌に眉をしかめるリドリーにクリフォードは慌てた。

「あ、ああ、失礼、そういう意味ではなくて、その、シドを、何もかもを、世界を変えようとしているように聞こえます」

「変えるのではない、利用されていない、雨ざらしになっているものを有効活用するんだ、クリフォード、わたしたちは誰からも、何も奪わない」

わたしがとんちんかんな事を言うと、クリフォードの表情がぱっと輝く。

「つまり、富の創造ですよ！ あなたたちは富を創造しようとしている！」

リドリーとわたしは互いに困惑顔で首を傾げる。

「すごい！ そうなんです。その富の創造の現場の物語が知りたいんです、書きたいんです、印刷したいんです、それを売って、シド中に知らせたいんです！ こんなすごいことが起こっているんだって！」

クリフォードはリドリーの手を握り、必死に頼み込む。

「その話を聞かせてください！ 本にしたいんです！」

「架空の物語、名前は全部換え、荒唐無稽な部分も真実だとはわからない程度には入れる？ それにこの話はまだ始まってないんだが」

「なおいじゃないですか！ 始まりから全部知れる！ あ、条件はそれで」

リドリーは考えあぐねていたが、その熱意に不承不承頷く。

「わかった。ときどき話を聞きに来る事を許そう。たまには同行してもいい」

「ありがとうございます！」

わたしには仲間がいる。

それが何でこんな風に乗って、助け合っているのかは分からない。

それでもそれは、わたしがキュディスから帰ってきたときに想像した、野バラの庭に集う仲間であるように思えてくる。

わたしは言う。

「クリフォード、わたしからひとつだけお願いがある」

「なんです？」

わたしは急に恥ずかしくなったが、思い切って言った。

「そのシリーズの表紙は、野バラの絵にして欲しいんだ」

夕刻が迫り、わたしと少年は老貴族の屋敷への家路につく。

少年は始終上機嫌で、ふんふんふんと鼻歌らしきものを歌う。

すぐに思い出したように立ち止まり、飽きずにセントラルを眺め、すぐに駆けてわたしに追いついてくる。

「リニー、あれを直す話をしていたんだろう！」

嬉々として跳ねる少年を見ているとこちらまで嬉しくなってくる。

「そうだ。あの人がたぶんいろいろ算段をつけてくれるはずだ」

「参加してもいいか？」

「ここでは、シドでは人に迷惑をかけなければ、好きにしていいいんだ。わたしが手を貸してもいい。ここはキュディスではない、縛り付けるような規律はない。ルールはあるがそれを守りさえすれば、いくらでも商売をしていい」

うんうん頷き、少年はまたセントラルを見上げる。

たしかに翼竜乗りほどセントラルで活躍できる人材はないだろう。いまにも飛びそうな少年のちいさな背を見て、あんがいこの国も捨てたものではないのかもしれないと思い始める。

ふいに少年は振り向いて言った。

「リニー、名前が欲しい。リニーが呼ぶ名だ、それが欲しい」

はっとする。キュディスでは成人する前は名無しですごす。成人し虹翼に配属される前の導き手たちは当然に名前がない。

「付けてくれ」

嬉々として言うが、何か切実なものを感じる。

(わたしが、名を聞こうなどと言い続けていたからか?)

それが一人前と認められる儀式だと思っているのかもしれない。

(なにがいいだろう?)

もちろんキュディス語がいいに決まっている。しかし、キュディス語には存在しない言葉もあって迷う。ふとひらめく。

「ウタリ。ウタリでどうだ」

それは、キュディスの翼竜乗りたちが翼竜を係留しておく、見張り台を兼ねた高い高い塔の意味。翼竜乗りはその塔より飛び立っていく。少年はすぐに頷き、うれしそうにする。それで何かを待つようにしばらくわたしを見上げる。

(そうか)

「これまで、ずっと、ずっと、名前を聞いていなかったな」

「ウタリ。ウタリだ、リニー」

わたしが手を差し出すとウタリはそれを握る。

そして、すぐに離して、セントラルを見上げて飛び跳ねた。

ウタリの見上げるたかいたかい塔、いまにもそこから無数の翼竜が飛び立つ気がした。

<了>

あとがき

最強にして、最大級の蛮族に、最強の文明国は勝てるのか。

モンゴル帝国に滅ぼされた金にルネサンスが起こっていたら？

オスマン・トルコにより陥落したコンスタンチノープルに蒸気機関が普及していたら？

そんな途方もない疑問が浮かんだのが10数年前。あまりにも面白そうでわくわくしてしまい、こつこつと設定を積み上げて、ようやく書き始めたのが1年前。自分で書いていても、気の遠くなるような旅路を経て、ラストシーンにたどり着きました。

野バラの諸侯シリーズ、第1話。諸侯たちの中核人物のひとりであるリニーの、シドへの帰還を描いた死神の帰還、完成をお知らせできます。

楽しめていただけたのであれば、幸いです。

本シリーズは、いろいろ迷ったあげく、野バラの諸侯シリーズと名付けています。

この架空歴史小説に相応しいのは、主人公の活躍ではなく、そこに生き歴史を動かした群像の姿であるべきと思ったからです。

スティーブ・ジョブズ物語ではなく、シリコンバレー物語であって欲しい。

ビル・ゲイツも書きたいし、サーゲイとラリーも書きたいし、ルイス・ガースナーも書きたいし、リーナス・トーバルズも書きたい。

そんなよくばりを満たすには、各話ごとに主人公が変わる形式がふさわしい。

これまでに類例がまったくないと思われる形式ですが、そんな形式で書いていきたいと思えます。

誰が主役というわけではなく、誰もが主役の歴史群像劇。

ようやくと始まったばかりです。

その第一弾は、野バラの諸侯随一の切れ者、死神リニー。

リニーは、あらっばい操縦で繰り広げられる空中戦を駆け抜ける最新鋭のジェット戦闘機のような趣ですが、大丈夫だったでしょうか（^_^； わたしは電子書籍端末のソニーReaderで校正をしているのですが、一気に読んだときには、あまりの暴れ馬ぶりにめまいがしそうになりました（笑）

さすがにリニー以上の暴れ馬は予定していないのですが、いきなり戦闘力最強のリニーだったんだけれども、ついてこれたんだろうか・・・、と心配になります。もしかして、読んでくださる方をイキナリF35の助手席に座らせたのではないか、本人がめまいを起こしているぐらいなので、怖くなります。

次作はたぶん、ボルニア王になる予定の次王と、それによるエスト陥落を描いた『鉄鎖の次王の恋』（タイトルは仮）になる予定なのですが、こちらはそんなにさすがに跳ね馬運転ではないと思います。その次がようやく、本編の主要格である、銃と火薬の天才の少年の物語になり、安定運転にはなるかと思うのですが、だいぶ先の話になりそうです（^_^）；

さて、このシリーズには実はたくさんのサブストーリーがあります。

といいますのも、わたしが設定を詰めるときに、サブストーリーを書くことによって設定を詰めていくというスタイルをとっているからでして、これまでに結構な数を書いています。

それらは、小説ではなく、ゲームブックという形になって公開されているのですが、もしご興味がありましたら、こちらをご覧くださいだければと思います。

野バラの諸侯の中でもリニーと双璧となるウォークが主人公のゲームブック、『辺境の祭り』『幽霊船（未完）』。

キュディスと並び北方二強と称されるトランの浮遊船乗りたちを描いた『ジャングルの要塞』『ミリーの天気予報』。

これらはこちらのサイトにアップされていますの、ぜひぜひご覧くださいませ。

<http://story-fact.com/>

実のところ、このリニーのキュディスでの冒険譚もゲームブックとして書き上げようとして失敗し、おお、じゃあこの物語をベースにして小説を書いてみようと思ったのが、この死神の帰還だったりするのです。思わぬ形で、野バラの諸侯シリーズの第一作となりました。

以上。長くなりましたが、感想など頂けましたら、喜びで打ち震えますので、頂けましたら嬉しいです。原稿用紙300枚近い長編にお付き合い頂きまして、ありがとうございました。

書き上げるのに、一年もかかってしまった（^_^）；